2017

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
3月号
No.645

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
2月号
No.644

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
1月号
No.643

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
6月号
No.648

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
5月号
No.647

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
4月号
No.646

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
9月号
No.651

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
8月号
No.650

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
7月号
No.649

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
12月号
No.654

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
11月号
No.653

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
10月号
No.652

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
1月号
No.643

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

謹賀新年

平成二十九年 元日

二〇一七年・平成二九年
丁酉（ひのととり）

今年は酉年。十干十二支、いわゆる干支で云うと「丁酉（ひのととり）」にあたる。

「丁」は草木の形態の充実した状態。発達の最終段階。

「酉」は果実が成熟の極限に達した状態。また酒樽の中で酒が発酵し、熟し、成る様を表している。

このような解釈から、今年は機運が熟して新たな勢力が発し、革命の岐路となると解説する人もある。

古代の中国で考えられた「干支」は、植物の成長の過程を十と十二の字で表し、その六十の組みあわせでできている。

植物は種子から芽を出し、太陽に向かって伸び、枝を広げ葉を茂らせ、花を咲かせて実をむすび、種に新たな未来を託す。人はもちろんのこと、時代の流れも植物の営みに似た変化を繰り返しているのだろうか。

そういえば竹の花は六十年に一度咲くという。干支の数と同じだ。

先人達は自然から多くの事を学んできたが、私達はその多くを忘れてしまっていないだろうか。それらを未来へ引き継げるだろうか。

自然の恵みに感謝し、自然を尊ぶ気持を伝え、健やかな心を育む仕事をしたいと、年頭にあたって気持を新たにしている。

黒芽柳　チューリップ

仙溪

花型　二瓶飾り

花材・花器

主瓶

黒芽柳（柳科）

煤竹竹筒

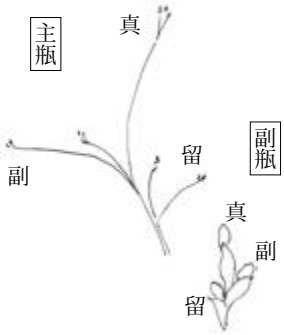
副瓶

チューリップ（百合科）

結晶釉小水盤（前田保則作）

黒芽柳は地味な花材だが、赤味を帯びた黒い花穂は個性的で、飴色の木肌にも品が有り、枝も素直で撓めやすい。生花にいけるなら赤椿を根締めにして和の雰囲気にまとめるか、色鮮やかなチューリップと株分けや二瓶飾りにして、モダンな対比を楽しむことが多い。

作例では黄色のチューリップを静かな風情にいけ、黒芽柳に動きを与えている。チューリップの花色からは春の訪れが感じられ、馥郁とした葉は全体の瑞々しさを補ってくれる。



出逢い花（27）　<表紙の花>　仙溪

ピナス（松科）
パンジー（菫科）
花器　陶製にわとり　紫釉陶酒杯　ラフィア

24年前に両親が買ってきた陶の鶏。派手な色使いで装飾されているけれど、品があるので床飾りにもなる。同じ質感のぐい呑みをラフィア椰子の紐を使って背負わせ、イタリアかさ松（ピナス）の若木とパンジーをいけた。臙脂色のラフィアを束ねて、鶏と器の隙間を埋めている。

動物の置物に花を背負わせるのはこれが2度目になる。なぜこんなふうにいけたか自分でも分からないのだが、今回も気に入っている。外国の松の優しさ。パンジーの色と表情。一体となったフォルム。偶然が生んだいけばな。

命を漲らせて、鶏鳴がとどろく。

新しい年のはじまりを祝おう。

万年青の生花　<2頁の花>　仙溪

花型　九葉一果
花材　万年青「残雪」（百合科）
花器　黒色釉水盤

はじめていけた品種で「残雪」という名前がついていた。大型の万年青で葉に白い斑が霜降り状に入っている。大変珍しい品種のようだ。昨年の新年に立花の前置にいけた後、生花にいけなおして2ヶ月間飾っていた。なんともいえない風格を感じる。

若松　木瓜　菊　<3頁の花>　仙溪

花材　若松（松科）　木瓜（薔薇科）
　　洋菊（菊科）
花器　燻紋黒釉水盤（矢野款一作）

若松のみどりは初春を言祝ぐのになんと相応しいのだろう。こんなに生命力に溢れた枝をつくることができる日本の文化に、感謝せずにはおられない。

松と相性のいい朱木瓜と、乙女のような薄紅色の洋菊を合わせると、若松の凛々しさが際立った。

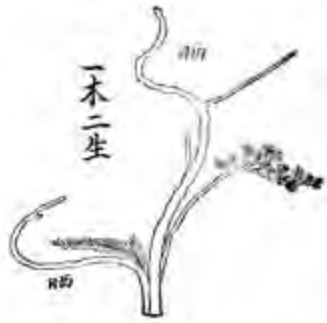
横から見た奥行き

立華時勢粧を読む　㉚

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

一木二生と云うは晒木を一本遣って、一方は松、一方は伊吹と付け分ける事を嫌う。松ばかりか、伊吹一色ばかりにてはよし。



一生二木と云うは苔木と晒木とを両方に遣って、伊吹一色にて生を付けるを嫌う。一方はまた松なれば苦しからず。

苔木晒木に生を付けるに真行草の三段あり。前より付けるを真と云い、後より付けるを行と云い、脇より付けるを草と云う。

前に円栢あり、後に松あり。中に晒木をはさむ時は、前の円栢の晒木になるなり。生木は体なり、晒は用なり、体用と次第するゆえなり。是を真の付けようと云う。又後の松の晒木なさんと思わば、円栢と晒木との間を草にて立きるべし。

前に黄楊てり葉などの苔晒木の付かぬ物ある時は、後の松の苔になるなり。是を行の付けようと云う。

請に松を立て、控枝に晒木をつかうに、正心に晒木の付くべき物なく、又ほかにうばうべき木なき時は、請の晒木となるなり。是古来の法式なり。

苔木晒木をうばうと云うは、苔木にても晒木にてもあれ、一本立てる時、松にも縁ちかく、

いぶきにも縁ちかき時は、この晒木を両方よりうばうとて大きに嫌うなり。松ならば松、栢樹ならば栢樹と、よく立て分けるをよしとす。

立花に苔木晒木のふときを好まず。細きは長く、太きは短く遣いて、いやしからぬを専らとす。水際にきれいに、細工見えぬをよしとす。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』
（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』
（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』
（思文閣出版刊）

第六十七図
二株砂物　伊吹真
中野五郎左衛門
伊吹　晒　松　苔　杜若　百合
小羊歯　栢植　要　檜扇

トーテムポール的に

仙溪

花材　バーゼリア（ブルニア科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　プロテア・コルダータ
　　（ヤマモガシ科）

花器　鍵穴型陶花器

バーゼリアの小枝の表情が気に入ったので小さないけばなにしてみた。濃赤色のアンスリウムと、足元には小さな葉物を一本。ハート形の葉をもつプロテア・コルダータは、南アフリカでは「愛の葉」と呼ばれるそうだ。長さが短く、腰が無いので扱いにくい花材だが、この小さないけばなには丁度あっている。

バーゼリアも南アフリカの植物。副材としていけると地味な花材だが、足をつけることで高く立てると、主役になって存在感が増す。

３種類の花材を、積み重ねるようにいけてみた。前から見ると、花器の形も含めてトーテムポールのようだ。異国の花の精霊が、静かに語りかけてくる。

横から見た奥行き

赤いメラレウカ

櫻子

花材　メラレウカ（フトモモ科）
　　ダリア２種（菊科）
花器　白地黒絵陶壺（森俊山作）

11月号では黄色のメラレウカに濃いオレンジ色のダリアを合わせている。日持ちがして香りもいい。色も鮮やかで、これから人気がでるだろうなと思っていたら、今度は赤いメラレウカが出てきた。

赤い葉は枝先だけなので、赤と緑が混じった感じ。若い葉が寒さで赤く色づくのだろうか。そういえばオタフクナンテンも常緑の葉が冬の間は赤く色付く不思議な木。この赤色のメラレウカも冬のいけばなに向いている。

今回は優しいピンク色の大輪ダリアを選び、赤いポンポン咲きを一本効かせてみた。モノトーンの広口壺にいけて朱塗りの敷板に置くと、花の品格が鮮やかに映える。

横から見た奥行き

ハート形のユーカリ

櫻子

花材　ユーカリ・ポポラス
（フトモモ科）
アメリネス（彼岸花科）
スイートピー（豆科）
花器　白条文陶花瓶（宮下善爾作）

このユーカリは葉が枝から少し離れたところについているので軽やかに見える。生まれたての葉は赤味が残り、暖かみが感じられる。

ユーカリ・ポポラスと呼ばれている。葉はおよそ丸形だが、希にハート形のものも混じっていて、とても可愛らしい。

とり合わせたアメリネスは初めて見る花材で、アマリリスとネリネの交配種。エクアドルからの輸入だそうだ。薄紫色のスイートピーと合わせると、優しい色の変化が楽しめる。器と敷物はユーカリの赤葉に合わせて選んだ。

横から見た奥行き

桑原専慶流いけばなテキスト643号
2017年1月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）
http://www.kuwaharasenkei.com

庭の千両

櫻子

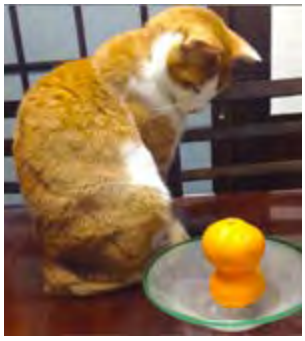
花材　アスコ（蘭科）
　　千両（千両科）
　　黄実千両（千両科）
花器　結晶釉花器（前田五雲作）

家の庭には赤と黄色のセンリョウがある。2年前に植えたのが少ししっかりしてきたようで、実がついたのが嬉しくて、惜しいけれど、小枝を切ってオレンジ色の蘭といけた。アスコと呼ばれるランには葉がついていないので、艶やかなセンリョウの葉がよく似合う。

雪の結晶がちりばめられたような一輪挿し。オーロラのように輝いて、いつまでも眺めていたくなる。

レモンとみかん

なんかへんだにゃ・・・



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
2月号
No.644

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

白梅の立花
南天の胴

＜表紙の花＞

「冨春軒初春の会」
挿花　朝倉慶佐
花型　除真（行の花形）
花材　白梅（薔薇科）
南天（目木科）
水仙（彼岸花科）
椿2種（椿科）
松（松科）
花器　天女模様銅器

南天の姿がうまく生かされている。とり合わせもいい。

蛇の目松の直真立花

＜2頁の花＞

「冨春軒初春の会」
挿花　二井慶博
花型　直真（真の花形）
花材　蛇の目松（松科）
松（松科）
木瓜（薔薇科）
菊（菊科）
小菊（菊科）
枇杷（薔薇科）
花器　銅立花瓶

葉に斑が入る珍しい蛇の目松が際立つように、色数をおさえてある。静かな優しさが感じられる。

アララギの立花
万年青の前置

＜3頁の花＞

「冨春軒初春の会」
挿花　桑原仙溪
花型　除真（行の花形）
花材　アララギ（一位科）
　　臘梅（臘梅科）
　　縞万年青（百合科）
　　菊（菊科）
　　椿（椿科）
花器　銅立花瓶

立花時勢粧の立花図には万年青が3図に描かれているが、すべて前置に使われている。立花秘傳抄には「藜蘆」「老母草」の字が使われ「花道第一の秘伝の物」「師範なくては立つべからず」と書かれている。

万年青は山の奥にひっそりと自生している。野生の万年青を採集していけていいのは最小限の枚数を切ってもいけることができる、確かな目と腕を持った師範のみ、と流祖の時代も大切にされていたのではないだろうか。栽培品種であっても、万年青は別格の扱いをすべきなのだ。

以前、流派の長老がいけた万年青の生花を見たとき、その神秘的な美しさに圧倒された。万年青は葉の一枚一枚に微妙な捻れや反りがあり、それをどう生かすかは経験がものをいう。いつの日か「出生玄妙」な姿を手に入れたい。

山茱萸（さんしゅゆ）の立花

仙溪

花型　除真（行の花形）
花材　山茱萸（水木科）
　　小手毬（こでまり）（薔薇科）
　　桃（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　松（松科）
　　椿（椿科）
　　猫柳（柳科）
　　小菊（菊科）
花器　広口陶花瓶

以前、2月末頃に稽古で立てた立花で、それぞれが開花した頃に撮影したのでとても色鮮やかだ。和花にこだわるなら正真には杜若というところだが、同じ菖蒲（あやめ）科のアイリス（ダッチアイリス）なら同じ温帯育ちで姿も清楚なのでよく似合う。

アイリスは開花すると結構な大きさになるため、真をしっかり除（の）かせて正真の空間を大きくつくっておくようにする。アイリスの青紫色が山茱萸の黄色を際立たせている。

立花を飾る

冨春軒初春の会には3瓶の立花を飾った。私は金屏風の前に。朝倉先生は富士の軸、晩白柚と。二井先生は金の扇の軸と。それぞれの写真では花の奥行きがわかる。

立華時勢粧を読む　㉛

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

柳

祝言。上中。晒木用い、苔用いず。

本草に時珍曰く、柳枝弱らかにして垂流す、故にこれを柳と謂う。

崔豹が古今註に曰く、微風なれども大に揺らつく、故に独揺と謂う。

説文、青柳、垂糸柳、人柳。

漢の武帝苑中に柳あり、一月に二度臥して帝を拝む、非情心あり、よって人柳と名付く。

和名　糸柳、八千代草、河高草、風無草。

古歌

あづさ弓春の柳に風見草のどけき色に打なびくらん

ふる雨の露に乱るる春薄梢に秋のかぜを見るかな

柳の心、初冬朔日より用うべし。初秋に葉落ちて初冬に芽ぐむものなり。名付けて芽張柳と云う。

柳の心立てる時は正心に葉あるものを用うべし。古来かぶろ松用いるは柳に葉のなきゆえなり。請、副の心得同前なり。

柳は心に立てるに一本立てでもくるしからざることは、しだれ左右へ長く前後へなびきたる物なれば、数枝の景気移る故なり。然れども祝言の花などには河柳一本下へあしらうべし。又請副には片なびきに遣い来るといえども、法度にあたらざる時は、もろなびきにても苦しからず。

柳はしだれ物なる故に、草木のしだれたる物さし合いなり。南天、冬薄、紫げんじ、つる水木、黄梅、連翹、竹。

柳の心ためようは、鋸にて七分きり、三分きりのこし、炭火にてよくあたためて、せんをかいてよし。細き柳はそのままあぶりて花巾をまきてねじためにして立てるなり。

河楊

祝言。水際より指し上て中上までに用いる。

本草曰く、楊枝硬くして揚げ起す、故にこれを楊と謂う。

俗にエノコヤナギと云う。白き狗子に似たるゆえか。

柳花杜詩に、顛狂柳絮風に随がって舞う。

藻塩云う白楊樹。

心、請、副に立てる時は、かならず水際まで下げるなり。水辺出生の物なれば上にばかりは景気うつりがたし。

白梅と立てまじえる事を嫌う。同色をにくむ心なり。

川柳九月ころは葉の下に白くめぐみてある

を、上の皮を一重むけば、白き花出るなり。こぶ柳またおなじ。

河柳しだれ物にあらず。心に立てる時は葉ある物たかくあしらうべし。南天などよく取り合う物なり。

立花時勢粧の118ある立花図のうち、柳（枝垂柳）は12図、河楊は2図に見られる。

真に枝垂柳を使った立花は3図で、3図とも梅があり、草花のとり合わせでは水仙が2図、万年青が1図。描かれた柳はどんな枝だったか、立体を想像するのも楽しい。

一方、河楊（かわやなぎ）はおもに「つや」として加えられている。白い花穂の柔らかな優しい枝が添うと、親しみが増すように思う。第72図では流枝にも使われて、軽やかな枝の流れが花型に動きを与えている。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第五十二図
立花　柳除真
西川和泉
柳　梅　松　水仙　柘植　千両
ひさかき　枇杷　嫩

第七十二図
立花　松除真
寺田八郎兵衛
松　菊　小菊　狗子柳　椿　柘植
熊笹　小羊歯　柏

立華時勢粧の時代

今月号の「立華時勢粧を詠む」の中で「本草に時珍曰く」とか「藻塩云う」などとあるのは、参考にした書物の名前やそれを書いた人の名前なので、紹介しておく。

李時珍（りじちん）

（1518年（正徳13年）～1593年（万暦21年））

字を東璧、号を「瀕湖仙人」といい、中国・明の医師で本草学者。中国本草学の集大成とも呼ぶべき『本草綱目』や、奇経や脉診の解説書である『瀕湖脉学』、『奇経八脉考』を著した。

現在の湖北省で、代々医師を務める家に生まれた李時珍は、幼い頃から、父の助手をしながら育った。子供の頃から病弱だった時珍は、医学への思いが強く、才能はたちまちに開花して、名医として名を知られ、明の皇族である楚王までが彼を頼るようになった。そして、時珍34歳の時に、明朝における医学の最高機関であった「太医院」に推薦を受けて、北京に赴く。だが、彼には中央の役人は性に合っていなかったらしく、1年後には帰郷をして、再び地元で医業を始める事となった。

中国の本草学は、神農が全ての薬草、毒草を食べて作ったとされる『神農本草経』を原典として、多くの増補が繰り返されてきた。だが、時代が下るにつれて、名称や薬効についての誤りや、重複、遺漏が多数含まれるようになっていった。李時珍はこれを憂慮して、新しい本草学書の編纂を志す。参考にした書物は800種、彼自身も多数の薬物の実物を収集して研究を重ね、26年の歳月を費やし、61歳の時に、『本草綱目』全52巻190万余字をもって完成させた。

最初その出版は神農を軽視するものとして事実上閉ざされる事となったが、李時珍に理解を示す人たちの奔走で、1593年に南京で出版、時の皇帝万暦帝への献上の機会を得、万暦帝から賞賛されて、出版に便宜が図られる事になった。

この本は日本などの周辺諸国のみならず、ラテン語などのヨーロッパ語にも訳され、世界の博物学・本草学に大きな影響を与えた。

藻塩草（もしおぐさ）

月村斎宗碩（そうせき）編　10冊　。1669年（寛文9年）刊。

連歌を詠むために用いるもので、古典等から語句を集め、注解を加えた書。20部門に分類されている。藻塩草は藻塩をとるために使うが、その際掻き集めて潮水を注ぐことから「書き集める」のかけ言葉になった。本書の題は「書き集めたもの」の意。

満作

仙溪

花材　満作（満作科）
花型　生花　草型　副流し
花器　広口陶花瓶

山では満作の花が咲いて黄金色に眩しく輝いているだろうか。そんなことを想像しながら、花が大きくて、太く立派な枝を一本買ってきて生花にいけた。満作の細枝はジグザグに曲がっているので、太めの幹の後ろに添わせるようにするといい。枝数は少ないけれど、花が大きいのでこのくらいでも見応えがある。

1月15日朝。雪に驚くレモンちゃん。

雪柳

櫻子

花材　雪柳（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　スイートピー（豆科）
花器　波文陶花瓶（竹内眞三郎作）

3月になると京都御苑の雪柳が満開になる。小さい梅のような花がこんもりと枝先まで咲いて雪が積もったようになるほど力強い。鴨川の土手の雪柳も鮮黄色の連翹と咲き競いあって、それに急かされるように桜の蕾が膨らんでいくような気がする。

雪柳の香りや景色を思い浮かべながら、アイリス、スイートピーを取り合わせた。

3月、京都御苑にて。

蘭２種と菜種

櫻子

花材　パフィオペディルム２種（蘭科）
　　カトレア（蘭科）
　　菜種（油菜科）
花器　乾山写手付鉢

パフィオペディルムという名前はギリシャ語のパフィア（ヴィーナス）とペディロン（サンダル、上靴）の二語からなり「ヴィーナスのスリッパ」という意味だそうだ。不思議な姿をしているので、よく食虫植物に間違われるが、花弁の一部（リップと言う）が袋状になっている。これは手前にいけたカトレアも同じで、この袋の中に虫が入ると花粉が付着して虫を介して受粉する仕組みになっている。

世界４大洋ランのパフィオとカトレアを一緒にいけるなんてとても贅沢な花だが、どちらも短くて悩んだ末、乾山写しの手付き鉢に盛り込んだ。

珍しいかたちを上から眺められるように。

桑原専慶流いけばなテキスト644号　2017年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

牡丹と蘭

仙溪

花材　牡丹（牡丹科）
　　オンシジウム（蘭科）
花器　乾山写石垣文陶花器
　　（森俊山作）

尾形乾山は、寛文3年（1663）京都の富裕な呉服商の三男として生まれ、兄は画家の尾形光琳。野々村仁清に陶芸を学んだのち、元禄12年（1699）37歳のとき京都鳴滝に開窯した。50歳で二条丁子屋町に移住し多くの作品を手がけているが、兄の光琳は絵付で乾山を助け、兄弟合作の作品が数多く残されてる。

写真の花器は乾山の石垣文を写してつくられたもので、平面デザインを立体化するために面取り技法が使われている。

花器だけ見ていると個性が強すぎて花材に悩んでしまう。ところが牡丹を一枝挿してみると、穏やかな表情に変わり、大輪黄色のオンシジウムを添えることで、器の色彩が生き生きしだした。器と花が出逢うことで生まれる美の不思議。

おそらく乾山の皿に描かれた石垣文様も、料理との出逢いで色んな表情に変化しただろう。斬新な意匠は300年前の人達を、あっと驚かせたに違いない。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
3月号
No.645

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

春の息吹

＜表紙の花＞　櫻子

花材　薇（薇科）
　　アネモネ（金鳳花科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　手付陶水盤（柳原睦夫作）

ゼンマイはいけばなに春を感じさせてくれる。家の庭にも何種類かの羊歯が生えているが、若芽が伸びて、可愛い渦巻きに今年も出会えるのを楽しみにしている。

花屋さんで茎まで渦を巻いているゼンマイを見つけたので、アネモネと盛花にいけた。花器に選んだ水盤の底には紺地に桃色と黄色で雲のような模様が描かれていてなんとも春めいている。そして偶然にも金色の手も渦巻き状だ。なんという偶然。

などと、一人で興奮しながら楽しくいけた。アネモネを低く挿して、ゼンマイの茎の動きを際立たせている。

横から見た奥行き

桃と桜

仙溪

＜2頁の花＞

花材　桃（薔薇科）
花型　草型　副流し
花器　陶コンポート

＜3頁の花＞

花材　啓翁桜（薔薇科）
花型　草型　副流し
花器　天女文銅花瓶

古い時代に中国から日本に伝わった桃。3月3日の節句にむけてお雛様を飾り、女の子の健やかな成長を願って桃をいける。桃の若枝のように力強くのび、桃の花のように、美しく優しい中にも芯の強さを持って育ってほしい。桃はお節句に相応しい花だと思う。

そして古（いにしえ）より日本で優しい花を咲かせてきた桜。私達の心に寄り添うように枝を伸ばしてくれる。今では世界で花を咲かせ、多くの人達に愛される桜たちのように、私達も優しさと思いやりを持っていたい。

そんな思いをこめて桃と桜をいけた。

斜め横から見た桜の生花の奥行き

小手毬（こでまり）　椿

仙溪

花材　小手毬（薔薇科）
　　椿（椿科）

花型　二種挿し　草型　副流し
花器　青色釉陶鉢

バラ科シモツケ属のコデマリは、ほかの花材にはない曲線を描くところが魅力だ。いける時には足元を割り、少し皮を削っておく。下方を真っ直ぐに撓め、真と副の枝を組み合わせてみて、いけあがりを想像する。

ツバキも主幹から出る横枝を生かすことを考えながら枝を観察する。どちらも元の姿を花型にどう生かすかがポイントとなる。

立華時勢粧を読む ㉜

立花秘傳抄 一

常磐木之部（つづき）

紅葉

一色物。祝言。

鶏冠木。順和名、紅楓。

唐詩

停車坐愛楓林晩

霜葉紅於二月花

諸書に載する所、楓葉を愛する事多し。但し和朝の紅葉とは少しかわりあるものか。

順徳院御歌

秋もはや時雨のころの色見草ちらまくおしき山風ぞふく

蔵玉集

立田山秋はたてなる錦草時雨てめぐる峯のよこ雲

同

小倉山しぐるるころは鳴鹿のつま恋草のいろものこらず

第百十二図
立花　紅葉一色真
（初版では富春軒）
楓　晒木

唐詩：杜牧の「山行」より　車を停めて坐に愛す楓林の晩。霜葉は二月の花よりも紅なり。

楓（かえで）の紅葉（もみぢ）は本朝詩歌第一の景物にして、名をいわずしてもみぢとばかり云うは楓の紅葉なり。されば桜をもっては諸花のかしらとし、楓をもっては紅葉（こうよう）の長とす。これ立花の賞翫極々の秘伝なり。されば一色物と定めて外の木草をまぜずして、楓ばかりをもって一瓶を成就す。名付けて真の一色と云う。

草の一色というは、心、正心、副、請、流枝、控枝等の長く用いる枝は紅葉を遣い、胴、前置、根じめ、擁（かこい）、艶（つや）、あしらいなどには生得紅葉（しょうとくもみぢ）することなき草木（くさき）を用いる。菊も白きを用いて色有るを嫌うなり。これ紅葉を尊敬したる心なり。

立てまぜて苦しからざる物、松、いぶき、黄楊、枇杷、檜、白かし、かた樫、くまざさ、小しだ、白菊、著莪、かようの類なり。外これを略す。

楓は葉付ひらめなる故、胴、正心に立てる枝まれなる物なり。出生すぐなるを見立て用うべし。

第百十三図
立花　紅葉一色
（初版では富春軒）
楓　晒木　伊吹　柘植
樫木　菊

紅葉は瓶上に高雄山をうつして峰より染め、桜は瓶上に吉野山をうつして麓より咲くといえど、伝授おおくこれある事なり。初心のうちこれを立つべからず。

立花秘傳抄一の終

ここまでが「常磐木の部」である。一般に常磐木は常緑樹のことだが、立花秘傳抄の「常磐木の部」には落葉樹の夏櫨、栗、檀、百日紅、柳や紅葉が入れられているのは、おそらく花木もの以外の樹木全般という意味合いだろうか。この後の「花の部」に桜、桃、梅といった花木が入れられている。花材解説のはじめに「常磐木」が納められていることも意味のあることだと思う。

今号では紅葉一色を3図紹介する。彩色された絵図を見ると、他の花材を混ぜて立てた立花と砂物は山の麓から峰へと続く景色を表現していることがわかる。すなわち紅葉した枝とまだ青い枝を巧みに使いわけている。それに対して楓ばかりで立てた真の一色はまさに一本の楓の姿だ。全体が見事に紅葉し、日影に青葉が使われている。晒木を見え隠れさせて、楓の風格と幽玄を感じさせる。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』
（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』
（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

第百十四図
一株砂物　紅葉一色
（初版では冨春軒）
楓　晒木　伊吹　柘植
苔

サングイネアルブラの実　チューリップ3種　菜の花（解説は10頁）

冨春軒初春の会（写真㊨）

家元宅での初春の会。3作の立花でお迎えし、お箏の演奏を聴きながら花手前をご覧いただいた。

まず花をのせた花盆と水指を介添が用意。家元が部屋に入り、花をいける。それを介添が床の間へ移し、花台ほかの道具をさげる。そしてお正客によるお床の拝見、という流れで進行してゆく。

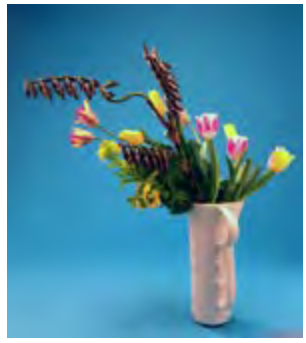
道具の準備やいける過程で花に込めた思いが伝わるように。花が置かれることによって心地よい風を感じてもらえれば。そんな思いで花手前をさせていただいた。

アルカンタレア・サングイネアルブラ

＜9頁の花＞　櫻子

花材　サングイネアルブラの実（パイナップル科）
チューリップ3種（百合科）
菜の花（油菜科）
花器　手付陶花瓶

ロケット状の硬い実が串の歯のようについていて結構な重みがある。サングイネアルブラという名でフィリピンからの輸入だそうだ。濃い色の花でシックにまとめるのもいいが、春らしい色彩の花と共に白い不思議な形の器にいけてみた。トロピカルに、リズミカルに。



横から見た奥行き

桃の紅白

＜10頁の花＞　仙溪

花材　桃白花（薔薇科）

ラッパ水仙（彼岸花科）
柘植（つげ）（柘植科）
花器　飴色釉陶鉢

＜11頁の花＞

花材　桃（薔薇科）
鉄砲百合（百合科）
スイートピー（豆科）
花器　碧釉陶花器（竹内眞三郎作）

紅白の桃の盛花と投入。

白花の桃の盛花は、洋花のラッパスイセンをいけているが、枯淡な桃の枝振りにあわせてツゲで足元をつくることで、静かな春の訪れを感じる自然調ないけばなになっている。

一方投入は、八重の桃色の花が潑（はつ）剌（らつ）と咲く桃の大枝に、薄桃色のスイートピーと純白のテッポウユリを合わせて、勢いのある現代調のいけばなにした。

花器の選択も雰囲気に合わせている。品格と華やぎ。男雛と女雛になぞらえて見て頂くのも一興かと。

横から見た奥行き

桑原専慶流いけばなテキスト645号　2017年3月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（28）

仙溪

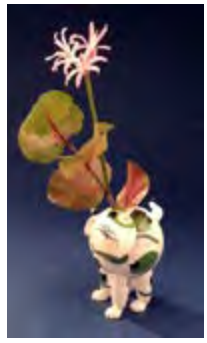
シーグレープ（蓼科）

アメリネス（彼岸花科）

花器　猫形ポット

（ビレロイ＆ボッホ製）

21年前ドイツのケルンで「花ふたり旅」撮影のために購入した猫ポット。ネズミの蓋がついている。シーグレープの丸い葉を見てこの器を思い出した。両親との思い出が詰まった大切な器。今後時々使ってみたい。アメリネスはアマリリスとネリネの交配種。



斜め上から見たところ

レモンちゃんが何か言ってます？

「お客さんにお茶だしてー」

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
4月号
No.646

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

カラー・エチオピカ

櫻子

花材　カラー「エチオピカ」
（里芋科）
ポピー（罌粟科）
シンピジウムの葉（蘭科）

花器　黒色ガラス花瓶

花茎も太くて長いカラーエチオピカ。南アフリカ原産である。

この様な咲き方を吹き詰（ふきづめ）咲きという。日本では長野県だけで作られているらしいが、今までに数回しか見た事がないカラーだ。

根気よく育てられたらこんな風に咲くのだろうか。湿地を好む宿根性で肥料の与え方も難しいのだろうが、肥沃で暖かな土地も必要だろう。

日本では情熱をかけて野菜も花もめずらしいものが作られていて有難いと思う。

私もあと何度この花をいけることが出来るだろうかといつもその瞬間を大切にしている。

ポピーに精一杯開いてもらって足元に添えた。

切りたての一番綺麗な蘭の葉で軽やかな姿に変えて、とっておきのガラス器に飾った。

横から見た奥行き

名脇役

仙溪

花材　白木瓜（ぼけ）（薔薇科）
　　薔薇（バラ）（薔薇科）
　　照（て）り葉椿（椿科）
花器　陶花瓶

伸びやかな枝にくっきりと白い花、鋭い棘もボケの個性を際立たせる。大輪の赤バラと投入にいけた。でも硬い枝と柔らかな花だけではちょっとぎくしゃくした感じがする。その間を繋ぐ何かが欲しくなる。この花をいけたのは２月下旬で、ちょうど照り葉のツバキが飴色に色付いていたのでとり合わせてみたら、しっくりと落ちついた。

いけばなのとり合わせを考える時、この照り葉ツバキのような味わい深い名脇役との出逢いは貴重である。主役を引き立てつつ、物語に厚みを与える存在。それを見いだすのもいけばなの楽しみ。

横から見た奥行き

京都東山花灯路２０１７

仙溪

花材　山茱萸（水木科）
　　百合（百合科）
花器　陶大壺（主催者所有）

東山花灯路・後期にいけたのはサンシュユと濃いピンクのユリ。野外で5日間、元気に美しく咲いてくれた。藁葺き屋根を背景にすると、山里の春を連想させる。いけさせていただいた大壺の表面は笹の刻印で埋め尽くされている。京の雅（みやび）を感じる。

おしゃべりな花達

＜表紙の花＞　櫻子

花材　ユーカリ（フトモモ科）
　　アマリリス（彼岸花科）
　　シンピジウム（蘭科）
花器　赤色ガラス鉢

毎年珍しくて美しいアマリリスに出会う。

今年はアマリリス・カリスマという品種。紅のインクを滲（にじ）ませたような発色。花弁によって滲み方が違い単調ではない。

園芸品種ではあるが、偶然この色に染まったのか、自然の芸術家がこんな花を作り上げたのか不思議でしょうがない。すでに数百品種作られて今も増え続けている。

アマリリスはヒガンバナ科のヒッペアストルム属だが、ヒッペアストルムとは馬のように大きくて星のような花という意味らしい。

横から見た奥行き

大輪のアマリリスには葉が付いていないので、今回はユーカリを添えた。

アマリリスがどっしりと豪華な花なので、動きのあるユーカリとピンクのシンピジウムを合わせて。

凄い賑やかな花だ。

皆んなが好きな方向を向いてペチャクチャおしゃべりしているようになってしまった。

オンシジウム

櫻子

花材　オンシジウム・ハニードロップ（蘭科）
　　都忘れ（菊科）
花器　結晶釉水盤（前田保則作）

テーブルに低く花を飾りたい時、この平たい水盤は重宝する。主張しすぎず、上品な形。飾る場所に合った器を選ぶようにしたい。

立花秘傳抄　二

花之部

桜

祝言。一色。

桜は和朝第一の花にして、名をいわずして花というは桜なり。唐には牡丹を花という。蜀の国にては海棠を花という。本朝、桜を愛するの始めは、人皇四十五代、聖武天皇桜を求め給う時、大和国春日後三笠山に八重桜あり。是を叡覧ありて、則四言詩作り光明皇后へ送り給う。詩に曰く、昌春季　山山美花　不見玉女　多恋歌

この詩、一句三字なり。句ごとに上の一字を二度読むなり。或人詩の心を歌に読む、日にそえてとり社まされ山桜いもに見せばや夜こそねられね。天皇還御の後、后この桜を見度よし仰せらるるゆえ、帝則奈良へ移し植えられ侍り、その後今の都へもこの花うつし来せしなり。百人一首伊勢が歌に、いにしえの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬる哉、これよりして後、上一人より、下万民にいたるまで、詩を詠じ、うたを読む。連俳共に研精覃思は、皆この花を賞美したる物なり。況や

第百十五図
立花　桜一色真
（初版では冨春軒）
桜　苔　万年青
小羊歯

聖武天皇（701～756）の詩の読み方＝「春季日々に昌なり　美花を山々に出す　玉女を覓むるに不見　恋歌夕夕に多し」

花道においてをや。余木余草に立てまぜずして一瓶を成就す。これを真の一色と、皆桜ともいいて、大きに秘伝とする所なり。たとえ又余木余草を立てまじゆるというも、花の咲くことなき草木をあしらいばかりに用いるなり。皆これ桜を、第一の花と尊美したる心なり。

本草綱目に図する所の桜、日本の桜にあらず。唐の詩文を勘ふるに、王荊公が山櫻の詩一首のみ有り。

山桜抱石映松枝
比並余花発最遅
頼有春風嫌寂莫
吹香渡水報人知

和名、吉野草。夢見草。尋源草。かさし草。人丸草。雲見草。曙草。あだな草。手向草。

蔵玉集

尋ね行く吉野の山の尋源草花より上にかかるしらくも

植え置きて見る人やある夢見草明日をもしらぬけふの命を

斎宮花尽異名

雲は猶立田の山の手向草ゆめの昔のあとのゆふくれ

第百十六図
立花　桜一色
（初版では冨春軒）
桜　苔　伊吹
樫木　柘植
小羊歯

王荊公＝王安石（1021～1086）北宋の政治家、詩人。

桜の立てまぜて苦しからざる物、松、いぶき、檜、栂、黄楊、樫木、白樫、小しだ、わくら、くまざさ、かなめ、外これになぞらうべし。

桜真の一色の時、前置におもとを用いる事、常の事なり。ある人の曰く、皆桜という時は前置までに桜を用うべきに、何とておもとを用いて皆桜といい、又は一瓶に伝受の一色と、伝受の前置と、二つ有る事は相(あい)うばうに似たり。いづれを賞翫とすべきや。答えて曰く、口伝あり。

桜に晒木用いぬ事は、桜は高山の物なれど松檜にかわりて木の性かたからず。よわいも久しからざる物ゆえ、晒木とはならず。古人これをかんがみて法式を定めたり。

世上まれなる初桜なんどは一色ならずとも立ててくるしからず、といえる流儀ありとも、ゆめゆめ用いべからざる事なり。

第百十七図
二株砂物　桜一色
(初版では富春軒)
桜　苔　伊吹
柘植　万年青
樫木

立華時勢粧の「紅葉一色と桜一色」

先月と今月で紅葉と桜の一色立花を6図掲載した。

「桜は諸花の頭、楓は紅葉の長」と書かれているように、極めて大切な立花図が連続で登場したことになる。百十八図のほぼ最後に登場し、それらすべてが見開きの図版であることからも、力の入れようが伺える。

「紅葉を尊敬する心」「桜を尊美する心」から、ほかの草木をとり合わせる場合、紅葉には「紅葉しない草木」や「色有るを嫌って菊も白花」、桜には「花の咲くことのない草木をあしらいだけに」用いるようにし、あくまでも紅葉を引き立て、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。自然の美に対する敬意が強く感じられる部分だ。

「高雄山の紅葉のように峰より染め」「吉野山の桜のように麓より咲く」ように立てよとは言うけれど、「伝授多くある」ので初心のうちはこれを立てないようにとも書いている。この部分を私なりに解釈するなら、高雄山や吉野山のようにしないといけないなどと囚われるよりも、まずは手にした枝をのびのび生かすことの方が大事なんだよと言っているように思う。

実際の立花図を見てみると、紅葉については2つの図で峰より染まっているように感じられ、紅葉だけで立てた真の一色にはそれは感じられない。先月号でも述べたが、一本の楓の大樹のようである。

一方、桜の立花図を見てみると、一見どの枝も少しの蕾がのぞくものの、ほぼ満開のように見える。桜はこだわりなく自由に立てているのだなと思ったが、よくよく見ると「砂の物」の控枝と流枝には蕾が極めて少なく、真や請の梢に蕾が多めであるように感じる。麓から咲き上る様をさりげなく写し取っている。

また、紅葉と桜の図を見比べると、楓には晒木、桜には苔木がそれぞれ効果的に使われている点にも注目したい。肝心なのは自然を手本にするということ。

そして又、桜を詠んだ聖武天皇の詩が面白い。一つの漢字を一度はそのまま読み、もう一度は二つの字に分けて読むというユニークさに驚かされる。他にも中国の杜牧や王安石の詩を引用しながら花の知識を深めさせてくれるなど、豊かな教養に加えて、読む側を花の世界へ引き込むような文章の力を感じる。

立花時勢粧の中でも特別な6つの図を掲載したことで、この連載の責任の重みのようなものを改めて感じている。流祖の技や思いや心といったもの、選ばれた詩や言葉たち、そして絵図から読み解く様々な教え、それらを一つでも多く手に入れるための手がかりとして、内容の紹介を続け、深めてゆきたい。

京の冬の旅協賛
第38回 京都名流いけばな展
第6次展
会期　2月28日(火)～3月5日(日)
会場　JR京都駅新幹線コンコース

山茱萸（さんしゅゆ）の生花

仙溪

花型　草型　留流し
花材　山茱萸（水木科）
花器　銅薄端（うすばた）

２月末に京都駅新幹線コンコースにいけたサンシュユの生花を持ち帰って撮り直した。春の花木が日に日に開いてゆく様は、確かな春の訪れを感じさせてくれる。

韓国の現代美術作家が訪ねてこられた時、韓国でもサンシュユと呼び、春一番に咲きますと教えてくれた。彼はこの夏の二条城でのイベントに出品するとのこと。再会が楽しみだ。花を愛する心が人と人を繋ぐ。

横から見た奥行き

連翹（れんぎょう）と椿の生花

仙溪

花型　草型　副流し
花材　連翹（もくせい）（木犀科）
　　乙女椿（椿科）
花器　煤竹竹筒

連翹は立華時勢粧にも見られる落葉低木で、春の陽光を感じる黄色い四弁花が、しなやかな枝に連なって咲く。「翹」という字には「反る、はねあがる」という意味があり、レンギョウの飛び跳ねるような枝の姿を連想させる。ところが、レンギョウの中国名は黄寿丹で、中国ではオトギリソウの仲間を連翹と呼んでいるそうだ。古く漢方薬として日本に来た時に、よく似た実なので間違えてしまったようだ。たとえ誤用だとしても、連翹の字とともにこの花を私達は愛している。

桑原専慶流いけばなテキスト646号　2017年4月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（29）

仙溪

躑躅（つつじ）（躑躅科）
黄金板屋楓（おうごんいたやかえで）（楓科）

花器　古陶壺

去年の4月に撮った写真。花展に出品したツツジの生花の残り枝が美しく花を咲かせたので、カエデ一本と出逢わせた。たった二本のいけばなだが、直角に曲がったツツジの横枝が面白く、赤い花と明るい緑の葉の対照が鮮やかだ。味わい深い枝であれば、このように大きな器にいけて、釣り合いのとれる相手を一本探してみるのも楽しい。

器と花と緑、器と枝と花。そういうシンプルないけばなの楽しみ方が、出逢い花には詰まっている。肩の力を抜いて、木や花のあるがままの姿を器に託す。そんな時にふと、見過ごしていた美しさに気付いたりするのです。

レモンだより

庭でも室内でも春を満喫中のレモンちゃんです。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
5月号
No.647

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

表紙の花の解説は8頁

裏白の木と芍薬

仙溪

花材　裏白の木（薔薇科）
　　芍薬（牡丹科）
　　河原撫子（撫子科）
花器　青瓷花瓶（清水卯一作）

花屋ではヤマナシの名前で出回るが、本当の名前はウラジロノキで、春から初夏の緑白色の若葉をいける。また希に秋の実もいけることがあるが、1センチほどの大きさで、リンゴを小さくしたような赤い果実である。

ウラジロノキとシャクヤクは相性がいい。作例では茎を深く挿したくて、花が前方へ向いてしまったが、できれば上向きに使いたい。但し充分に水揚げをしておき、さっといける。いけた後も小まめに水切りしたい花材の一つだ。カワラナデシコで華やぎを加えた。

横から見た奥行き

薄暑の花

櫻子

花材　花水木（水木科）
　　イリス・オクロレウカ（菖蒲科）
花器　陶花瓶（メキシコ人作）

八重桜が終わる頃、春の花会などの行事が一段落するせいか少し淋しい気分になる。そんな頃に一斉に咲き始めるハナミズキのお陰で又気分も新たになれるのが嬉しい。夏の最初、「薄暑」だ。初夏の服に着替えて、颯爽と出かけなければ！

水木の仲間で花が美しいので、ハナミズキと呼ばれている。初夏の日差しを受けて新緑の輝きが増す中で、枝を横に広げてのびのびと目立つ花を咲かせてくれる。投げ入れでそんな風にいけてあげたい。

オクロレウカはギリシャ語で、Ｉｒｉｓ（虹）Ｏｃｈｒｏｌｅｕｃａ（黄色みを帯びた）という意味。トルコ原産のアヤメ科の多年草で湿地に育つ。

今年は花菖蒲に代わってオクロレウカの方が花も葉も育ちが良く、お稽古花としても何度もいけさせてもらえた。

五月晴れの爽やかな青空を背景に元気いっぱい咲いてほしい。

横から見た奥行き

プロテア・メリータイム

仙溪

花材　プロテア・メリータイム（ヤマモガシ科）
　　薔薇（ばら）（薔薇科）
　　ピットスポルム（扉（とべら）科）
花器　ガラス花器

新しい花材を使った作例。プロテア・メリータイムは南アフリカ原産。ピットスポルムはニュージーランド原産。

横から見た奥行き

立華時勢粧を読む　㉞

立花秘傳抄　二

花之部（つづき）

梅

祝言。上中下。

又作呆象子在木上也

梅乃杏類　故反杏為呆

唐名　氷肌　玉骨　花兄　花儒者

和名　初名草　香栄草　風見草　春つげ草

緑の花

古歌

万代に咲るなかにも初見草春をまたてや花を見るらん

深山には見雪ふるらし難波人浦風しほる香はへ草かな

山里の軒端にさける風見草色をも香をも誰見はやさん

冬の内は心に立つべからず。冬至梅の白梅に先立ちて、枝短く立たるはにほいふかく、白き梅の苔木に立て合わせてほのかなるは、時節相応の気色にて目もとどまり、珍花のあしらいとも名付くるなり。

梅は木つき風流に、枝ぶりはたらき有るをよしとす。絵師の云う、桜は花を画き、梅は木をえがく。又曰く、松に三景あり、梅に八景あり。又詩にも疎影横斜とあれば、この心をもって瓶上にその姿をうつすべきなり。

紅梅と白梅と一瓶に指合う時、盛りの花の方を上に指し、残花をば下に指すべし。紅梅は紅梅、白梅は白梅と、おのれおのれのはたらき有りて、混乱せざるように指すべきなり。又請の方へ白梅ばかり、控枝の方へ紅梅ばかり、一方づつに指す手もあり。梅のずわいをつかう時はたとえその縁遠くとも本木より出たるように、うつり面白く指すべきなり。本木なくては、ずわい遣うべからず。

梅の心は下へ遣いさげ、上の勢いを下の梅にうけさせ、請の梅は控枝にうつし、副の花は流枝に見合わせて働きあるように指して、又一瓶の梅、合て一木の気色に立つべきなり。

紅梅を遣う時は白き椿を用い、白梅を指す時は赤き椿を用いる。

白梅に狗子柳、ずわいに かすおしみ 嫌うなり。

白梅に水仙を立合する時は、赤き物にて色を切り、又梅に遠ざけて立つべきなり。

ある人問う。それ梅は諸木の兄、百花の長たるに、何とて一色には立てざるや。答えて曰く、松桜楓は高山の物にしてさらに余木をまじえず。一面のけしきあるゆえなり。梅は林園の物にて、類木をもって、一面に生えることなし。故にその景気よろしからず。大庾嶺万株の梅ともいえど、それは我が朝の景気ならねば瓶上にはうつしがたし。

「梅古文作呆　象子在木上之形　梅乃杏類　故反杏為呆」＝本草綱目からの引用。梅は木の上に実がなるので呆・某。杏の類。杏が反って呆となった。（という意味か）

疎影横斜＝林逋の詩「山園小梅」の一文。　大庾嶺＝中国、南嶺山脈東端の山。和漢朗詠集にも読まれる梅の名所。

立花秘傳抄・花の部では、桜の次に梅が登場する。「立花時勢粧」の百十八ある図のうち、梅は約4分の1の30図に描かれている。ちなみに前号までに紹介した中ですでに14の図に梅が描かれていた。

真に梅を使った立花は5図ある。その一つ、第25図では垂直に立ち上る真、さらに請のつやとして白梅が使われている。梅の垂直の幹が、左右の松の特徴ある枝の動きを際立たせている。とり合わせの水仙は白梅と隔てて使われ、赤い葉の小枝と赤椿で色が添えられている。

もう一作よく似た構成の第62図を紹介しておく。こちらは松の直線と紅梅の曲線の対比が見事だ。左に大きく立ち上る紅梅の枝。この枝を生かすために、極めて自由に花形を工夫している。細い枝の動きと、大きく空いた空間の枇杷の葉が絶妙なバランスを作っている。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』
（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』
（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』
（思文閣出版刊）

第二十五図
立花　梅直真
竹葉軒治兵衛
梅　松　晒木　熊笹　柘植　椿
水仙　枇杷　嫩

第六十二図
立花　松除真
中野宗左衛門
松　水仙　梅　枇杷　柘植　嫩

夏櫨（なつはぜ）

〈表紙の花〉　仙溪

花型　生花　草型　留流し
花材　夏櫨（躑躅科）
花器　ペルシャ緑釉花器
（宇野仁松作）

表紙の生花はナツハゼである。撮影した後、華道京展に出品した。細枝が複雑にからみあった立派な枝だったが、おそらく特別な育て方がされたのだろう、枝は粘り強く、3週間経った現在も、家の玄関で元気に葉を茂らせている。

もちろん水揚げには注意を払っている。足元はよく割り、皮を削ってある。そして幸いにも、ほとんど撓めずに美しい姿になってくれた。この木を何年もかけて育てた人と、それを私に届けてくれた花屋、そして私。そんな繋がりに感謝せずにはいられない。

華道京展では敦盛草（あつもりそう）との二瓶飾りで出品した。（写真①）

アツモリソウは青いカットガラスにいけたが、広い流派席の中でキラリと際立っていた。会期後半に白根葵（しらねあおい）に変えたが、どちらも好評をいただけてほっとしている。

器の選択は副家元と相談することが多い。二人で考え、良い組みあわせになった時、喜びを分かち合える。

①

夏櫨（なつはぜ）　紫蘭（しらん）

（写真②）

仙溪

花型　生花　一種挿し
花材　夏櫨（躑躅科）
　　紫蘭（蘭科）
花器　青彩陶花瓶（藤平正文作）

表紙の夏櫨の生花をいけた後で、使わなかった枝を用いた一作。

平安神宮献花大会（4月14日～16日、平安神宮 額殿）に出品した花である。

かなり暴れた枝だったので、ざっくりと生花の形に留めてから、刈り込んでバランスを整えた。

白地に青い模様の器に若葉の緑。そこへ薄紅色の紫蘭を2本のぞかせて、季節の色を加えた。

②

レモンちゃん
と庭のホウチャクソウ（宝鐸草）。

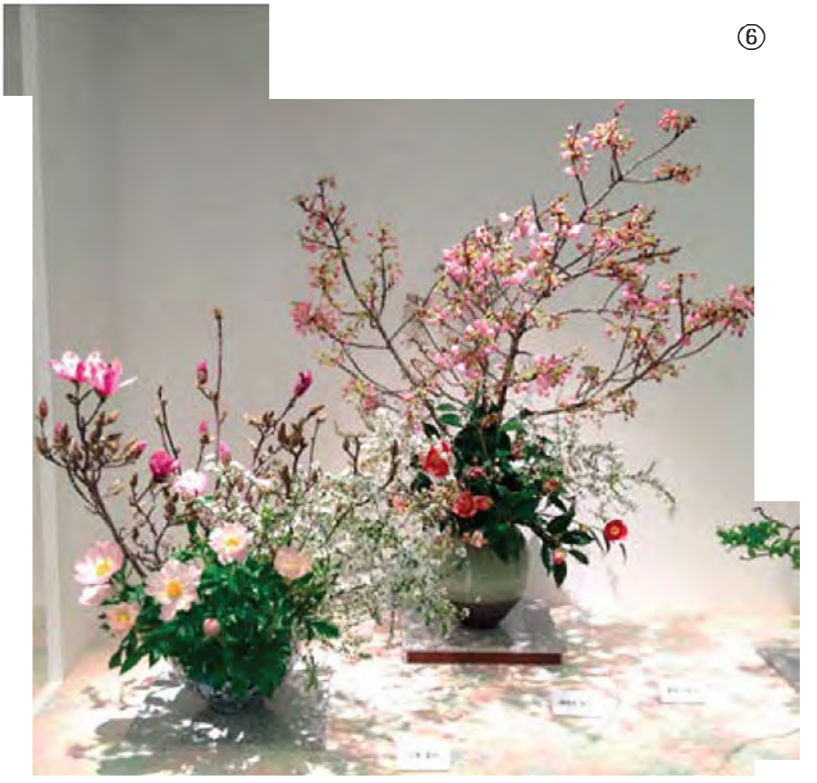
第68回 華道京展 「風・流」

4月6日～11日 大丸ミュージアム〈京都〉

⑤

③

⑥



④

木苺と芍薬の生花

＜10頁の花＞　仙溪

花型　生花　株分け
花材　主株　木苺（薔薇科）
　　子株　芍薬（牡丹科）
花器　紺色釉水盤

木苺（種名は構苺（かがいちご））は出荷量も増えてきて、若葉の時期に生花にもできるようになり、白い花が次々に咲いてくれる。黄色くなった葉や、花や蕾が萎れたらこまめに取り除く。子株には小型の花を選び、季節の彩りを添える。

夏櫨の立花

＜11頁の花＞　仙溪

花型　除真立花
花材　夏櫨（躑躅科）
　　山芍薬（牡丹科）
　　裏白の木（薔薇科）
　　下野（薔薇科）
　　姫百合（百合科）
　　撫子（撫子科）
　　擬宝珠の葉（百合科）
花器　紺色釉水盤

立花研修会の作例。正真のヒメユリと請のヤマシャクヤクは受筒に挿している。ヤマシャクヤクの実が花材として栽培されるようになったおかげで、希（まれ）に花も切り花で売られる。

ギボシで受筒を隠したため、写真では不自然なシルエットになってし

まった。ギボシは低い位置のみに使うべきと反省。この作例であれば、受筒は小葉の葉蘭や著我、檜扇の葉で覆うようにすればよかっただろう。

桑原専慶流いけばなテキスト647号　2017年5月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

クロウフィッシュの器

櫻子

花材　カラー（里芋科）
　　カーネーション（撫子科）
　　玉羊歯（玉羊歯科）

花器　絵付陶鉢

ニューオリンズでは冬が終わり暖かくなり始める春頃からクロウフィッシュ（ザリガニ）のシーズンが始まる。釜茹でした真っ赤なザリガニをこの器に山盛りして、皆で味わうのだろう。

ザリガニと一緒にコーンやジャガイモ、ネギ、ニンニク、レモンも描かれている。レシピを忘れてもこの器を見れば買い揃えるものを忘れない。きっと待ちどおしい旬の器なのだろう。

そんな器に花をいけるなんて、ニューオリンズの人はどう思うかしら。両親が買ってきてくれた器なので、花器としてずっと大切に扱っている。

苞の大きく開いたカラーとギザギザな花弁のカーネーション、玉羊歯。5月の旬をいけてみた。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
6月号
No.648

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

表紙の花の解説は9頁

宝鐸草

<2頁の花>　仙溪

花材　七竈（薔薇科）
　　スイートメモリー（百合科）
　　宝鐸草（百合科）

花器　ガラス花瓶

庭のホウチャクソウが年々逞しく育っている。4月末頃の花の盛りに数本切って写真に撮った。

赤いガラス花器に、ナナカマドの若い翠とホウチャクソウの優しいみどり、百合のやや濃い緑が重なって清々しい。薄紅色の花色と花器の透明な赤が、みどりの濃淡を一層引き立ててくれている。

ホウチャクソウは花の後に実が膨らんでやがて黒く色付く。また違うとり合わせで楽しもうと思う。

横から見た奥行き

ライラック

〈3頁の花〉　櫻子

花材　ライラック（木犀科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　ガラス花器
　　（チェコ・モゼール）

ライラック（リラ）は水揚げの難しい花だが、優しい花色と甘い香りが大好きなので、皮を削り足元を割って短くいけ、少しでも長く楽しみたい。黄バラの潑剌（はつらつ）とした鮮やかさが加わることで、初夏の生命の輝きが感じられる。

横から見た奥行き

創立50周年記念
日本いけばな芸術展

5月10日(水)～17日(水)
東京日本橋高島屋８Ｆ

日本いけばな芸術協会・名誉総裁の常陸宮妃華子殿下をお迎えして行われた創立50周年記念式典では、桑原専慶流華老の上野淳泉先生（岡山県）が50年間の役員歴に対して表彰を受けられました。

上野先生は13世家元とともに、発会当初から参画され、以後50年間、欠かすことなく花展に出品し、現在は協会の特別参与になっておられます。永年のご功績に敬意と感謝を表します。

立花秘傳抄　二

花之部（つづき）

桃

祝言。上中下。苔晒木つけず。

時珍曰く。桃の性、花早く、子繁し、故に字木兆に従う、十億を兆と曰う、その多きを言う。

異名　仙木　招客　不言

和名　八千代草　八重桃　緋桃　白桃　源平桃　西王母。

古歌

人来やとまやの軒端の柴がきに立ちかくれたる姫もものはな

のむ人や千代をかくらん御酒古草叶齢のこころなりせば

あかねさす色こそまかへ日本のむろふのけもも花さかりかも

桃の木つき、枝ぶりすなおにしてはたらきなく、挫に苔晒木を付けざる古法なる故、替わりたる花形も出来ざる物なれど、松檜の風流なるをあしらうべし。立てよう梅に同じ。

海棠

祝言。上中下。苔晒木付けず。

李賛皇集に曰く。花木、海を以て名と為す者悉く従う、海上来　海棠これなり。立て様梅に同じ。

異名　海紅花　海棠梨。

梨の花

祝言。上中下。苔晒木付けず。

異名　玉乳　鵞梨　和名詳ならず。

辛夷木

非祝言。上中下。苔晒木付けず。

木筆。

非祝言証歌

打ち捨てて手をにぎりたるこぶしの木心せばきをなげくころ哉。

杏の花

祝言。上中下。苔晒木用いず。

異名　金杏花　甜梅花

古歌

いかにしてにほひそめけん日のもとの我が国ならぬからももの花

もろこしの吉野の山に咲きもせておのが名しらぬからももの花

百日紅

祝言。上中下。苔晒木用いず。

異名　紫薇花　猴刺脱

蘇枋花

祝言。上中下。苔晒木用いず。

右の五木立て様梅に同じ。

木蓮花

非祝言。上中。

異名　鬼饅頭。

桜、梅と続いて次は桃。桃の木は枝ぶりが素直なので、松や檜の風流なものをあしらうといいと書かれている。

桃は第四十九図に見られ、真と請に使われているが、どちらも素直に伸び上がる姿なので、変化のある伊吹を流枝にすることで、花形に面白みを加えている。

桃の桃色と山吹の黄色に、春の華やぎを感じる。

立花図には他に第七図で白木蓮が使われているので、再掲載となるが紹介しておく。赤い躑躅が白い木蓮に華やぎを与え、非常に大きな枇杷の葉をあしらいに使うことで、整然とした花形に躍動感を与えている。この大きな枇杷の葉先は黄色く彩色されていて、花形の要（かなめ）としての風格を感じる。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第四十九図
立花　桃除真
山本四郎左衛門
桃　山吹　伊吹　晒木　柘植
馬酔木　枇杷　著莪

第七図
立花　木蓮除真
除真立の内真の花形　冨春軒
木蓮　伊吹　松　柘植　躑躅　小菊
樫木　枇杷　著莪　要

平安神宮献花会

会期　5月13日(土)～14日(日)

会場　平安神宮　額殿

卯の花

＜9頁の花＞　仙溪

花材　卯の花（雪の下科）
　　芍薬（牡丹科）
花器　赤茶色釉陶壺

花屋ではウノハナ（卯の花）の名前で売られていたが、ウノハナはウツギ（空木）の別名。この小さな花はヒメウツギだろうか、はじめていける花材だ。ごま粒ほどの白い蕾が穂になって枝にびっしりついている。枝は猫の尻尾のようにしなやかに弧を描いて伸びている。枝の動きを生かして、空いた空間にシンプルに芍薬だけを覗かせた。白い小さな花の連なりと、馥郁とした桃色の花。面白い調和が生まれた。

横から見た奥行き

フリチラリア

＜表紙の花＞　櫻子

花材　フリチラリア（百合科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　アロカシア（里芋科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　ガラス大鉢（近藤高弘作）

フリチラリアは黒百合や貝母百合の仲間で、イラン、トルコ、アフガニスタンなどに分布する多年草。頭頂部に小葉が集まってつく品種が一般的だが、写真のフリチラリアの先端に小葉はない。調べると、頭に小葉のあるのがインペリアス、今回いけたのはペルシカという品種のようだ。茎が太く丈夫で存在感がある。大輪のおばけアンスや、大きなアロカシアの葉といけても、それらに負けていない。茎に動きもあるので、アンスリウムと共にゆったりと立て、足元はアロカシアで引き締めた。最後にミリオクラダスで水際を整える。

表紙の花

赤と白のユリ

＜10頁の花＞　仙溪

花材　ハンギングヘレコニア
（芭蕉科）
百合2種（百合科）
花器　網目文陶花器
（竹内眞三郎作）

ワインレッド色と純白の大輪のユリ。少し前まではこんな色使いをしようと思ってもできなかった。こんな見事な花をつくる人がいることに感謝である。毛の生えたハンギングヘレコニアともよく合っている。器には敢えて色の無いものを選んで、花の色を際立たせた。

花菖蒲（はなしょうぶ）の生花

＜11頁の花＞　仙溪

花材　花菖蒲（菖蒲（あやめ）科）
花型　行型
花器　黒波文金彩陶水盤
（竹内眞三郎作）

東京の花展でジャーマンアイリスの生花をいけたこの器に、今度は白花の花菖蒲をいけてみた。形も模様もモダンな器なのに、葉組の生花がよく映る。

花は真、内添（うちぞえ）、副（そえ）、胴、留（とめ）に入れ、葉組のみの副沈みと控を加えて、七体でいけている。花菖蒲の生花にはいい花と、それ以上にいい葉が必要である。

【　記録　】

月刊 茶の間 ２０１７初夏号
今、あなたに会いたい
京を継ぐひと伝えるひと
桑原櫻子さん

レモンちゃん

賀茂川の河原で保護されたレモンちゃんが家に来て5年になる。人見知りをしない穏やかな性格なので、彼に会うのを楽しみに稽古に来られる人も少なくない。時々生徒さんに混じって話しを聞いていたりする。

桑原専慶流いけばなテキスト648号　2017年6月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

宮下先生の器

仙溪

花材　金鎖（きんくさり）（豆科）
　　宿根スイートピー（豆科）
花器　彩泥陶扁壺
　　（宮下善爾作）

器の底は菱形で、左右の角からは緩やかなS字を描いて立ち上がり、前後の角からは直線が垂直に昇ってゆく。どうすればこんな形がつくれるんだろう。幾層にも重なる彩泥のグラデーションは、彼方まで続く山の連なりを縦に切り取ったようだ。

この器を作られた宮下善爾氏が他界されて5年になる。宮下先生（と私達は呼んでいる）はもう居られないけれど、こうして先生の器に花をいけることはできる訳で、そうすると何だかすぐ傍に先生がいるような気がして、変な花でもいけようものなら、辛口の批評をされそうで緊張してしまう。

魂を込めて作られたものには、作り手の気が宿るのだろう。いい器には不思議な力がある。

今回、東京の花展で使っていただいたが、黄色いキングサリが見事によく合っていて評判がとても良かった。宮下先生もきっと喜んで下さるだろう。テキスト用に少しとり合わせを変えて、再びキングサリをいけて撮影した。

金色に輝く空から、仙人が雲に乗っておりてくる、そんな感じの花。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
7月号
No.649

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

七夕飾り

＜2頁の花＞　櫻子

花材　笹（稲科）
　　鳴子百合（百合科）
　　姫百合（百合科）
　　桔梗（桔梗科）
花器　濃茶色陶花瓶

七夕飾りは短冊に願い事を書いて笹に飾る行事で、五節句のひとつ。桃の節句や端午の節句のように祝う行事ではないが、その時々の季節の行事を大切にしてきた日本らしい習慣だと思う。

家の南側の壁をきれいに直し、笹を植えたら良く繁ってくれている。それ以来、笹をいける事が多くなった。姫百合や桔梗の花も、笹といけると、七夕の星のように見える。

白斑（ふ）が多くて珍しいナルコユリはまるでMilky Way（天の川）。

横から見た奥行き

広口花瓶にいける

＜3頁の花＞　櫻子

花材　美白百合（百合科）
　　胡蝶蘭（蘭科）
　　バンダ（蘭科）
　　クテナンテ（クズウコン科）
花器　デルフト花瓶

口の広い花瓶は、中に剣山を入れ、支柱を4本立てて十文字配りを固定しておくといけやすい。

お祝いのいけばなの参考に、白い百合と、ピンクの二種類の蘭のとり合わせでいけてみた。

横から見た奥行き

師範会総会・研修会

会期　5月21日(日)
会場　京都ブライトンホテル

総会の後の家元と副家元による自由花デモンストレーションでは、初夏の花材のいけ方を解説したが、特に「花器」の重要性についてお話した。家庭で楽しむ時も、ハレの場にいける時も、花器の選び方によって、花の表情が随分変わる。手間をおしまず、仕掛けを工夫することで、特別な器をさらに生かすことができる。

①

対のガラス花器にいける　仙溪

花材　花菖蒲2色　紫陽花3種
花器　ガラス花器2瓶（チェコ・モゼール）

②

緑と紺と金の花器にいける　櫻子

花材　黄花素馨（きばなそけい）　ライラック　薔薇
花器　角形陶花瓶（フランスにて購入）

③

花材　芭蕉の葉　ヘレコニア
モンステラ大小
グズマニア

レモンちゃん

ある夜、野良猫とケンカしておしりを負傷。その後、舐(な)め壊(こわ)して傷口がひろがり獣医さんへ。傷がふさがるまで、顔にエリザベスカラーというものを装着せねばならなくなりました。おかげで傷も小さくなってきましたよ。

勝げて計うべからず＝いちいち数え上げることはとてもできない。　ケ様の＝このような。

立華時勢粧を読む　㊱

立花秘傳抄　二

花之部（つづき）

椿

祝言。下段。

海石榴。

本草綱木（目のまちがい）に山茶花といえる日本の椿なり。格古論に曰く。一稔紅　千葉紅　千葉白。この外勝げて計うべからず。

古歌

川上の　つらつら椿つらつらに　見れともあかぬ　とせの春かな

かぎりなき　はこやの山は幾とせか　しら玉椿　しらす行くすえ。

椿古方に城中、又得道の祝いに立てず。そのゆえは、花おちやすき物なれば、落ちるという言葉をいむ故なり。すべて草木の花、ちる、しぼむ、落花、皆不吉の言葉ある時は、椿に限りたるも覚束なし。但し幾日ありても落ちざる様に細工して、立てるときは、苦しかるまじ。

椿は大木にしてしかも大輪なる花、水ぎわに指すこと法度に背き、出生にたがうことはいかにぞや。一説に云う。椿は近代はやり出て、一輪二輪だにも大切の花なる故、木をおしみて長く切ることなし。故に水ぎわばかりに、遣いならわせりと云えり。然れども椿のみに限らず、木槿、長春、花柘榴、ケ様のたぐい古来より水ぎわに指す時は、前の説用いがたし。或る師の曰く。惣じて草木の景気高木といえど、高く指してあしきあり。大輪といえどひくく指して面白くあり。椿、長春、木槿などは前置、水ぎわに谷をかまえ、洞を作りて、二三花ほのかに立てたるこそ、気色もおかしく勢い有るといえり。誠に古人花道を鍛錬して、法をさだめ給う、その道理尤奇なるかな。

椿は早咲き、冬の内、春、残花、四色の指し様あり。又花五輪三輪指すとも、花ことごとくはたらき有りて、よくみゆる用に指すべきなり。然れども三輪遣う時、一輪かくれるは苦しからず。二輪かくるるを嫌う。

椿は葉をもぎて、外の葉の見事なるを、借りて立てるなり。若ばえへは、胴まであげても苦しからず。

赤き椿、白き椿、一瓶に遣う時は、二所にわけて指すべきなり。もし一所に立てることあらば、白きは白き、赤きは赤きと、花の縁、混乱せざるように立つべし。

椿は前置にかぎらず、三輪、又は五輪とも指す時は、胴作り、前置、ゆるやかに、或いは、流枝、控枝の前をくつろげ置き、松、黄楊の木陰より、物にさわりなく、ありありと、見えるように指すべきなり。初学の時は、花形くつろがず、水ぎわせまるゆえ、大輪なる花遣うに、自由ならず。よくよく、工夫をなして指すべきなり。

椿を前置に用いるに、浮沈の二つあり。花うく時はよわく、しづむ時は、幽玄ならず。且つ外の草木をも、前置に遣う時、この事あれども、椿に至りては、専ら肝要とす。

椿の葉に樫木の葉を借り用いる時、二三枚はくるしからず。花と借り葉とよく景気うつるように指すべきなり。

むくげの花に、椿の葉をかりて、椿の花と見る人もあり、木槿の花と云う人もあり、古来その論あるといえど、立花に借葉と云うことあれど、借り花と云う名目なし。古昔はおもとに、ほうづきを借り、天南星の実を借るといえど、当代これを大きに嫌う。むくげは、葉しおれやすきゆえ、椿の葉を仮り来たれり。むくげは、夏の景物なるを、しいて椿と見なさんは無下の事なり。

山茶花

椿に同じ。

椿（もしくは山茶花）は33の絵図に見られるが、すべて前置など、いわゆる下段の扱いである。そしてどの絵図の椿も存在感があり、窮屈な感じはしない。

第二十二図では前置に赤椿が使われている。梅は紅梅で、その楚（すわえ・ずわえ）が真になっている。水仙の白い花がのぞき、副には黄花の枝垂れ枝が春の兆しを感じさせているが、山吹では季が合わないし、連翹でも早すぎる。黄梅もしくは雲南黄梅であろうか。

第二十二図
立花　梅除真
除真の内草の花形　桑原半兵衛
梅　苔　黄梅　松　檜　椿
柘植　枇杷　伊吹　水仙

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』
（日本華道社刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』
（思文閣出版刊）

※「第68回華道京展 - 風・流　FU-RYU -」を主催する京都市の門川大作市長、京都いけばな協会の桑原仙溪会長と大丸京都店の丹羽亨店長が同展やいけばな、京都の文化・芸術について語り合った。（3／29）

大丸創業300周年記念鼎談「京都の文化といけばな」

―京都は「いけばな発祥の地」と言われます。なぜ京都でいけばなが生まれ、その魅力が衰えずに続いているのでしょうか？

■門川大作・京都市長　京都の歴史は精神文化と物質文化が融合し、心と物が刺激を与え合って進化してきました。その背景に人々の絆や自然との共生や宗教的情操があります。いけばなも、お供えする供花が原点ではないかと思います。今、世界の人々が花を愛で、お茶を愛し、香りを楽しみますが、京都に生まれ日本で発展してきた、いけばなもお茶も香も哲学にまで進化させたのは京都です。「はんなり」という言葉は、そもそもは「花あり」です。花と人間の生き方、暮らしの美学と哲学を融合させ、花により人を育ててきた歴史や街づくりがあります。それを大丸さんが応援し続けてこられたのが、この華道京展でしょう。33もの流派が仲良く切磋琢磨し連携するのが、京都のすごさですね。

■桑原仙溪・京都いけばな協会会長　日本文化をリードしてきたのが、なぜ京都だったかと考えると、三方山に囲まれて手の届く所に自然があること。さらに公家文化への憧れがいろんな文化を育む背景になった。風流を愛でる雅の心が京都の文化の象徴だろうと思います。そしてオリジナルな美を創り出そうとする強い気持ちを持つ人が多くいたこと。室町の足利将軍、利休、光悦、宗達らのように。近く映画「花戦さ」が公開されますが、新たな美を生み出そうとしていた時代の空気を感じられるのではと期待しています。いけばなは生きている自然と一緒に作る芸術、文化、美です。それらがすべての文化、芸術につながり、影響を与えてきたと思います。そんな京都に文化庁が移転します。

■丹羽亨・大丸京都店長　この華道京展は昭和25年にスタートし、大丸は昭和36年から関わり半世紀やらせて頂いています。大丸は今年で創業300周年。1717年、伏見で当時は小さな呉服商だったのですが、徐々にいろんなものを取り扱い百貨店となる中で「物」だけでなく「事」にも重きを置き、文化や芸術をお客様に提供しなければならないという使命が出てきた。京都はいけばな発祥の地であり、この華道京展をどうしてもやりたかったのだと思います。徐々に参加する流派を広げて頂いた。全国の百貨店で華道展はいろいろやられていますが、33流派もそろうのはなかなかないです。

■門川　絶対ないですね。日本の華道の最高峰じゃないですか。

■丹羽　33流派の方たちが切磋琢磨しお客様を楽しませて頂いている。これからも文化、芸術の中心地である京都において、大丸京都店はこういう事業に力を入れていきたい。文化庁が京都に来ることを考えると、一層力を入れなければならないと思います。

―いけばなの未来や可能性についてどうお考えですか？

■丹羽　寺社仏閣が京都ほど多い都市は、世界でも稀です。その信仰の中でお花が脈々と受け継がれてきた。いけばなは人に安らぎを与えます。京都は世界でも尊敬される街です。来店される外国の方が増えていますが、物だけでなく芸術や文化にも興味を持たれている。今後も京都の文化の良さを世界の方々に紹介できるよう、微力ながら貢献できればと思っています。

■桑原　今年の正月から大丸京都店では、ダウン症の書家と画家による「共に生きる展」が開かれましたが、これからの時代は共に生きることが大事だと感じました。先日、染織家の志村ふくみさんが自然を尊ぶ気持ちと自然の恵みに感謝する心を育てる仕事していきたい、と言っておられました。まさに、いけばなもそうです。花を選び、器を選ぶ時に感じるのは、人と同じだということです。最初は苦手な人同士でも段々と気持ちが通じ合う。いけばなも回を重ねていると、花の方から心を開いてくれる。自然と心を通わせることを、人と心を通わせることにつないで頂きたいと思います。社会でいけばなを生かす場を、皆さんと一緒に作っていきたい。ドイツで花を生けていると、言葉の通じない人たちとも花を通じて心を通い合わせることができました。東北の被災地でも一緒に花を生けている中で打ち解けることができた。お花はそういう力があります。

■門川　世界を見ると、争いや環境破壊など心を痛める問題があります。日本人が大事にしてきた心を再認識せねばと思います。自然を尊び自然に感謝する。人も自然と共に絆を大切に生きる。よく京都のお勧めの観光の場所は、と聞かれると、京都の街ではどこでも御地蔵さんがまつられていて、きれいな水と生花がお供えしてある、と言って紹介します。世界に宗教都市はたくさんありますが、街の至るところに御地蔵さんがまつられているような街は他にありませんね。日本の文化のすごさは暮らしの中、衣食住と地域社会の中にあります。ヨーロッパ文化は上流階級のものだったと言われている。明治維新の頃に日本の識字率は9割を超えていた。ヨーロッパは5割。日本は、暮らしの中に文化があり、字を教えた。花も教え、長屋の小さな家でも花を生ける場所が暮らしの中にあった。でも床の間がなくなったりして、花を生ける所がなくなってきた。家の中に花を生ける場所を復活させられないだろうか、と思っています。

―今回の華道京展は、大丸創業300周年を記念して特別展示もあるのですね。

■丹羽　大丸は創業者の「先義後利」という言葉を社是としてスタートしました。その言葉の本質をもう一度見極めたいと思っています。顧客第一主義と社会的貢献の意味を噛みしめて、京都の方々に支持されて何とか300年やってきた。何か恩返し、貢献ができないかという思いがございます。大丸の300周年のテーマは「不易流行」です。芭蕉の俳諧の理念で、古い歴史の中にも新しさを取り入れていくという意味だと思うのですが、それはいけばなにも通じるものがあると思います。それをテーマに打ち出しながら、68回目の華道京展を華々しく開催するとともに、今後も京都のために頑張ってまいりたいと思います。

※京都新聞情報サイト「ことしるべ」より写真と文を転載させていただきました。

映画「花戦さ」

映画「花戦さ」はもうご覧になっただろうか。池坊専好（初代）が主人公となって、千利休や豊臣秀吉と、いけばなを通じてどのように関わったかが描かれている。

映画の中では、「立花」を中心に、様々な花をいけるシーンを観ることができる。当時の人達がどんなふうに花をいけていたか、とりわけ専好が花をいける心のありようが、ひしひしと伝わってくる。

専好は野村萬斎さんが演じている。佐藤浩市の利休との会話が特に印象に残った。まだの方は是非。

七竈（ななかまど）の生花

＜9頁の花＞　仙溪

花型　草型　副流し
花材　七竈（薔薇科）
花器　銅製手付花器

よく葉の茂った太枝1本を捌（さば）いていけた。足元の太いところを最初に入れ、その後ろから枝を出してゆく。

横から見た奥行き

太陽がいっぱい

〈表紙の花〉　仙溪

花材　ヘリコニア・プシッタコルム（里芋科）
向日葵（菊科）
ミリオクラダス（百合科）
花器　ガラス鉢

最近のヒマワリは俯（うつむ）かないものが多く、前方へ出すことができる。ミリオクラダスでヒマワリを支えた。

横から見た奥行き

木瓜の立花　＜10頁の花＞

京華会・朝倉慶佐出品作

花材　木瓜（薔薇科）
杜若（菖蒲科）
下野2種（薔薇科）
松（松科）
イボタノキ（木犀科）

花器　銅立花瓶

太い見事な木瓜である。朝倉先生が出品されていた時は、薄紅色の花が賑やかに咲いていた。撤花後、花は落ちてしまったが、写真に撮らせていただいた。真から分かれ出た副の下がり枝と、右側に張り出た請の枝が、絶妙なバランスを作っている。

鉄砲百合の立花　＜11頁の花＞

仙溪

花材　鉄砲百合（百合科）
トルコ桔梗3色（竜胆科）
カーネーション2色
（撫子科）
オクロレウカの葉（菖蒲科）
鳴子百合（百合科）
スモークグラス（稲科）

花器　白黒陶花瓶

草花だけで立てた立花。洋花であっても、同じような環境に咲く植物を組み合わせると、自然な趣の立花になる。

桑原専慶流いけばなテキスト649号　2017年7月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

スモークツリーと祭り寿司

櫻子

花材　スモークツリー（漆科）
　　柏葉紫陽花（紫陽花科）
　　レナンセラ（蘭科）
花器　練り込み陶花器

梅雨に入る少し前になるとスモークツリーが咲き始める。不稔花（種を結ばない花）の軸部分（花柄）が長く伸びて羽毛のようになった時が一番の見頃となる。

ヨーロッパ、ヒマラヤが原産地で乾燥気味を好むので、日本の梅雨時分に咲くのは迷惑だろう。雨の中ではなかなか爽やかな羽毛になりにくいと思う。

岡山のお弟子さんも庭にスモークツリーを育てておられる。風通しと日当たりの良い場所に植えておられるので、のびのび育っている。

6月の中旬には、スモークツリーを主材にしたお稽古を、もう2年通してさせてもらえている。庭の木を切ると、新鮮で枝ぶりも選べて、何よりもきれいな葉が付いてきて、活き活きとしたいけばなになるのが有り難い。切るときに樹液が出るが、松ヤニのような香りがする。ウルシ科の木だが、かぶれないようだ。

今年のお稽古は切りたてのスモークツリーに紫陽花やエレムルス、ギガチンウムなど、カラフルな花を一本ずつ合わせてみた。ふわふわした雲の中に、初夏の花が気持ち良く咲いているような花になった。スモークツリーには明るくて派手な花が合うように思う。

いけ終わって鑑賞した後は、家で作られた祭寿司でもてなして下さる。ちらし寿司の上にモガイやエビ、サゴシなど、岡山ならではの具が10種以上盛られる。京都の地味なちらし寿司とは違うな～といつも感激して頂戴している。

来年も又スモークツリーがのびのびと育ってくれます様に。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
8月号
No.650

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

グラジオラスとアジサイ

＜2頁の花＞　櫻子

花材　グラジオラス（菖蒲科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　ステンレス籠

近年、アジサイは輸入も増えて、一年中いけられるようになった。今回も2頁と3頁にアジサイをいけているが、ともに花色が鮮やかだ。赤い方にはグローイング・アルプスという品種名がついていたが、他の花色もあるようだ。

グラジオラスも時期が長くて花色も多い。アジサイとグラジオラスで、お気に入りの色の組みあわせを見つけたら是非2種でいけておきたい。あとは似合う器を考えるだけ。これがなかなか難しいのだが。

夏なので、ひんやりとしたステンレス製の籠を選んだ。大小二重に重ねると、銀色の森のように見える。籠には水が入れられないので、こういう時のために黒い器を合わせてある。

横から見た奥行き

トリアシショウマ

＜3頁の花＞　仙溪

花材　鳥足升麻（雪の下科）
　　紫陽花（紫陽花科）
　　オクロレウカの葉と実
　　（菖蒲科）

花器　カットガラス花器

トリアシショウマはユキノシタ科チダケサシ属の多年草。葉が萎れやすいが、水揚げに充分気をつければ、なんともいえない野性味のある花だ。

オクロレウカは葉をよく使うけれど、春の花と、そのしばらく後で希に実も出てくる。ただし、茎が柔らかくて実が重いので、あまり長くは使えない。でも、こちらも野趣を感じる花材だ。

重厚なガラス花器に、鮮やかな濃いピンクの紫陽花と投入にした。トリアシショウマがいい味を出してくれている。

横から見た奥行き

ピッチャープランツ（食虫植物）

＜表紙の花＞　櫻子

花材　黄花カラー（里芋科）
　　プロテア（ヤマモガシ科）
　　サラセニア（サラセニア科）
　　アンスリウムの葉（里芋科）
花器　濃赤色ガラス花瓶

虫をとらえて袋で消化するという、風変わりな生態を持つピッチャープランツと呼ばれるサラセニアの葉。北アメリカ原産で「ペテン師のトランペット」とかオウムのくちばし」などと呼ばれている。

食虫植物は大抵気持ち悪い姿のものが多いが、サラセニアの葉は赤い網目模様が美しく、個性的で側に飾りたくなる。昆虫を捕らえ消化して、やせた土地でも生き延びることが出来るので、その不思議な魅力に引きつけられているのかも。

初夏の頃咲く花も独特な形をしていて、ミシシッピーの沼地で育つ風景はまるで遠く離れた惑星の景色のようだ。

トロピカルな雰囲気があるのでカラーとプロテアを一緒にガラス器に生けてみた。

横から見た奥行き

山桃（やまもも）の生花

＜4頁の花＞　仙溪

花型　草型　副流し
花材　山桃（山桃科）
花器　銅製手付薄端

立花秘傳抄（りっかひでんしょう）の石楠花（しゃくなげ）の解説に、石楠花をいける場合に楊梅（やまもも）の葉を使うといいと書かれている（今号6頁）が、楊梅はヤマモモの漢名で、ヤマモモとシャクナゲの葉の付き方はよく似ている。

ヤマモモは東アジアの暖地に育つ常緑高木。実は赤く熟し食べられる。中国には樹齢千年に及ぶヤマモモもあるそうだ。

大枝から枝どりしていけたが、折れやすいので注意を要する。

栂（つが）の生花

＜5頁の花＞　仙溪

花型　草型　留流し
花材　栂（松科）
花器　銅製手付立花瓶

ツガ（トガ）はマツ科ツガ属の常緑性針葉樹で、マツ科モミ属のモミによく似るがモミのように葉先は尖らない。またイチイ科のイチイ（アララギ）にも似るが、実が異なる。

花展でいけたあと、家の玄関に飾った。重みがあるので花器は丈夫で安定感のある銅の立花瓶を選んだ。貴重な花材に感謝をこめて、水を毎日入れ替えることが肝心。

頭風＝頭痛。　長春＝中国原産の四季咲きバラ。　至孝＝この上もない孝行。　躑躅＝少し歩いては止まること。　中比＝なかごろ。そう遠くない昔。

立花秘傳抄　二

花之部（つづき）

石南花

祝言。中。

本草綱目に曰う、千石の間、陽に向かう処に生ず、故に石南と名づく。

一名、風薬。よく頭風を治す、故に名づく。

順和名、ともら木、くさなむさ。

石南花、葉あしき物ゆえ、楊梅の葉をかりて用いる。

長春

祝言。下段。

花の常に絶えざるを以て、長春と名づく。

異名、月季花、月々紅、闘雪紅。

又曰く、この花四時にある、故に日月花と云う。

躑躅

祝言。上中下。

陶隠居本草の註に云う、羊誤ってこれを食すれば、躑躅して死す、故にこれを以って名づく。世俗に云う、羊の性至孝なり、この花蕾んで赤きを見て、母の乳となす、躑躅して膝を折り、これを飲まんと欲す、故に名づく云々。

古歌

花さけば秋かとおもふ火とり草見るに紅葉の色もまかへば

浅からぬおもひを人にそめしより泪にいろは小つつじの花

姥つつじ

同前

姥つつじは葉のなきをいう。

山つつじと云うは、花葉ともに、ちいさく高くはえる故、心に用いる。むらさきつつじ、同前。心に立てる時は、請、副、控枝、流枝なんど、つたいおもしろく、あしらい花やかに、下はもちつつじ、小つつじ、琉球つつじなどにて、色取りよく、誠に春の山を、見るごとく立つべきなり。

蓮花つつじ

非祝言。上中下。

羊不喫草、黄躑躅という。

餅つつじ

祝言。水ぎわ。

羊躑躅という。

五月つつじ

祝言。水ぎわ。

本草に、茵芋（さつき）、杜鵑花。

段のつつじと云て、いろいろのつつじをあつめて胴、前置、流枝、或いは控枝などへつづけて立てるなり。これは賀茂山の檀のつつじと云、名所の風景を、中比の名師瓶上にうつして花形となす。これ相伝の花なり。

つつじは苔の付やすき物なれば、立花にもほそきを用いる。

かうぼけ　榠櫨（めいさ）

非祝言。控枝、流枝、中段まで用いる。

常のぼけは水ぎわばかりに用うべし。

馬酔草花（あせほのはな）

非祝言。花は中下。

葉ばかりは水ぎわに用いる。

和名、あせみの花、あしひの花。

祝言にあらざる歌

おそろしやあせみの花を折たきて雨にむかひて祈るいのりは

池水に影さへ見えて咲香ふあしひの花を袖にこき入れ

あせほの花は、葉の下より咲き出て花うつむきたれば、高く指して見あぐる気色面白し。また松の奥、つげの陰よりかたき物に取り合わせて、ゆるやかに立つべし。

榠櫨（めいさ）＝花梨（かりん）の別名。

ツツジは13の絵図に見られ、真に使われている立花が一瓶ある。第五十五図がそれで、二種類のツツジと山吹が伸びやかに生かされた、いかにも春らしい立花だ。立花瓶の大きな手の丸みが、ツツジや山吹の柔らかな動きと呼応している。

立花時勢粧の絵図にはいろんな立花瓶が描かれているが、花材の特徴や季節感にあわせて使い分けられている。どんな器に立てられているかも、是非味わって見てほしい。

第五十五図
立花　躑躅（つつじ）除真
小川源右衛門
躑躅　山吹　苔　松　杜若
柘植　熊笹　小菊　著莪

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』
（日本華道社刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』
（思文閣出版刊）

檜扇の生花

＜写真①＞

花型　行型
花材　檜扇（菖蒲科）
花器　黒釉水盤

檜の薄板をつないで作った檜扇と呼ばれる道具は、奈良時代に日本で生まれたとされているが、おそらくもっと以前から、現在ヒオウギと呼ぶこの花には悪霊を退散させる力が備わっていると考えられていたようだ。「古語拾遺」というものの中に、「烏扇」の名前で出てくる。

それによると、昔、神代に大地主神（おおとこぬしのかみ）が田をつくる際に、御歳神（みどしのかみ）の怒りによって苗葉が枯れてしまった。その祟りを去らせる方法の一つに「烏扇を以て扇げ」と告げられ、そのとおりにして苗葉は茂り、年穀も豊かに実った、とある。

だとすると、後の時代に、貴族が厄除け魔除けのために、その烏扇の力にあやかって、それに似せて作ったものが檜扇で、それを常に身につけていたとも考えられる。

ひょっとするとこの花が、すべての扇子や扇のルーツなのかも。古の日本人は、今よりもっと自然に学ぶ謙虚な心を持っていたのだと思う。

夏櫨と檜扇の生花

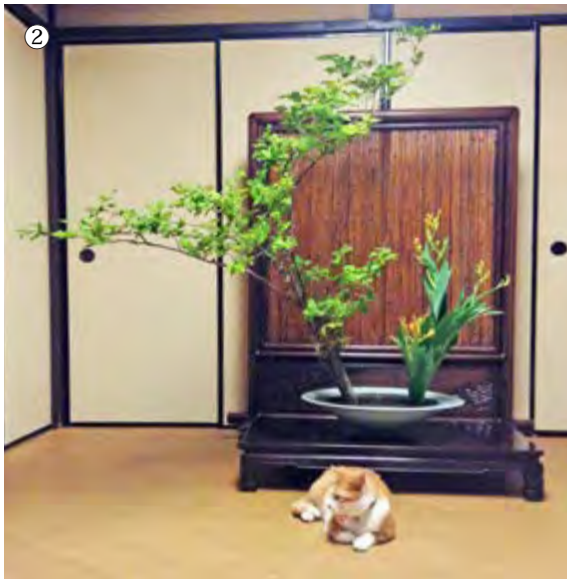
＜写真②＞

花型　生花株分け
花材　夏櫨（躑躅科）
　　檜扇（菖蒲科）
花器　砥部焼青磁鉢（大西光作）

京都では昔から、祇園祭の花として檜扇をいけて飾る。いけられる檜扇のおよそ半分は、京都府北部の宮津市で栽培されたものだそうだ。茎がよく反り返った「黄龍」「真龍」という品種で、葉も整って美しく、生花をいけるのに向いている。

八坂神社前にできた祇園祭ぎゃらりいでの檜扇展示会に、青磁の大きな水盤を器にして、ナツハゼとヒオウギで株分けの生花を出品した。出品中はナツハゼに青紫色の鉄線を絡ませていたが、広い水面に涼しげに映っていた。

写真は、会期を終えて持ち帰り、玄関にいけなおしたところ。すっかり傷が治ったレモンちゃんが、器の水を飲みに来ては、花の前で風流を楽しんでくれていたようだ。



夏櫨と檜扇ほかの投入

＜写真③＞

花材　夏櫨（躑躅科）
　　檜扇（菖蒲科）
　　為朝百合（百合科）
　　桔梗（桔梗科）
　　松明花（紫蘇科）
　　草連玉（桜草科）
花器　陶花器（竹内眞三郎作）

祇園祭いけばな展で、大丸京都店にいけた花。ヒオウギは高さを出すために葉蘭で巻いたホルダーに挿している。朱塗りの敷板に白黒のモダンな器。厄除けの花と、色付き始めたナツハゼ。白、青紫、黄、赤の花で雅な祭のいけばな。

タニワタリノキ

櫻子

花材　谷渡の木（茜科）
　　姫百合2種（百合科）
花器　通草籠

岡山の先生が育てたタニワタリノキを初めて生けたのは、4年程前で、それから花屋さんでも切り枝を見るようになった。

屋久島原産の珍しい常緑低木で、谷間に群生するところからこの名前になったらしい。クチナシやサンタンカと同じくアカネ科の木。花は丸く咲きルリ玉アザミに似ていてとても可愛らしい。

細長い雄しべが突き出すからか、人工衛星の木という名前もある。

夏の頃に艶やかな緑の広葉をつけた枝はありがたい。この時期の枝物は種類が限られていて、小さく生けても伸びやかさを感じさせてくれるひと枝だ。

アケビの籠にヒメユリと生けて、軽やかで涼しげな花として楽しませてくれた。

ペンフレンドに会いに

母・素子の妹、章子さんには、中学生の頃に文通を始めたドイツ人女性の友達がいる。6月に会いに行くというので、アメリカへ同行した。

章子さんのペンフレンド、カリンさんはオペア留学（海外ホームステイ先でベビーシッターをしながら学校に通う）でアメリカを訪れた時、同じくドイツ人留学生と出会って結婚。現在は、カリフォルニア州サンフランシスコ郊外の、プリザントンに暮らしている。IT企業が集まるシリコンバレーで働く人も多く、比較的所得の安定した人が多く住む町だ。

私達4人（もう一人、カリンさん繋がりの友人、花苗（さなえ）さんが加わって）はカリンさんの家に寝泊まりして、一緒に食事をつくったり、公園をゆっくりと散歩したりしながら、新たな親交を育んだ。

カリンさんの周囲の人は皆、健康志向が強く、毎朝散歩し、ジムに通い、少し値段が高くても有機野菜にこだわって、ファーマーズマーケットで旬の野菜や果物を買う。「健康に注意して、明るく楽しく暮らすことで、医療や薬に頼らず、年を取っても自分のやりたい事ができるようにしてるのよ」とカリンさん。私達をいろんな所へ連れて行くために、毎日何時間も運転して下さった。とても優しくて、タフな女性だ。

①

②

③

④

⑤

カリンさんに強く勧められて、章子さんと私達の3人で、ヨセミテ国立公園にも行くことが出来た。花崗岩の岩山に囲まれた、緑豊かな渓谷だ。特に春から初夏までは雪解けと雨によって雄大な滝が生まれる。なかでも北アメリカ最大落差のヨセミテ滝は、公園内のいろんな場所から見る事ができ、遠くからの眺めがなんとも美しい。

ヨセミテ渓谷には自然を満喫するために多くの人が来る。キャンプ場、コテージ、ホテルなどが、自然に配慮してつくられている。様々なハイキングコースがあり、それぞれの起点を結ぶ無料巡回バスが走っている。私達もヨセミテ滝の下滝を見に行ったが、森の中を流れる川をたどりながら、平坦な遊歩道を歩く楽しいコースだった。

歴史を感じるマジェスティックホテル（旧アワニーホテル）に泊まれたことも貴重な体験となった。岩山と森と川と。朝の散歩で野生のシカやリスに出会い、夜は星空を眺めた。

叔母が大切に温めてきた友情のおかげで、めったにできない体験をさせてもらえたことに感謝している。

①カリンさんの庭で摘んだ花でテーブル花をいけた。どの花も可愛い。
②隣に住むご夫妻と公園を散歩。ご主人は日本人。種子島出身で、若くして単身アメリカへ渡った強者（つわもの）。
③カリンさんファミリーとの朝食。娘さんの手作りマフィンにベーグル、ワッフル、フルーツ色々、スモークサーモン、ピクルス等々。
④⑤ファーマーズマーケットには色とりどりのオーガニック野菜、果物が。ジャガイモとブロッコリー。
⑥ヨセミテ滝の下滝でマイナスイオンを満喫する。
⑦雄大なヨセミテ国立公園はユネスコの世界自然遺産。
⑧ホテルで。寛（くつろ）ぎの空間が奥へ続く。
⑨日本で花をいけてねと、カリンさん夫妻にいただいたアンティークの水指に、赤いバラとサンキライで出逢い花をいけて写真に撮った。

⑥

⑦

⑨

⑧

桑原専慶流いけばなテキスト650号　2017年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

ルリタマアザミ

仙溪

花材　アナベル（紫陽花科）
　　瑠璃玉薊（菊科）
　　デルフィニウム・ベラドンナ（金鳳花科）
花器　白磁花器（福本双紅作）

ルリタマアザミはヨーロッパ原産のエキノプスという多年草の園芸種だが、朝鮮半島や日本の九州などに分布するヒゴタイ（肥後躰、平江帯）もほぼ同じような花だ。瑠璃色で球形の花は独特の面白さがあるが、瑞々しさに欠けるので、扱いが難しい。

涼しげないけばなにしたくて、マットな表面に仕上げられた白磁の器に、同系色のデルフィニウム・ベラドンナといけて、緑白色のアナベルで花と器を調和させた。花器のフォルムも軽やかで、青い帽子をかぶる女性のようにも見える。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
9月号
No.651

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

草紫陽花（くさあじさい）

＜2頁の花＞　櫻子

花材　草紫陽花（紫陽花科）
　　ベロニカ・ブルーエイリアン
　　（胡麻の葉草科）
　　ヒペリカム（弟切草科）
花器　通草籠（あけびかご）

クサアジサイはアジサイの仲間だが、アジサイより少し遅れて7月～9月に咲く。アジサイと比べて茎が細く、葉も薄くて細長い。やや湿った林に生える山野草だ。花は白または淡紅色。最初白花でも、やがて淡紅色に変化するものも多いそうだ。

あまり保ちの良い花ではないが、自然の風情がある。中央の両性花が結実する秋頃にもいけてみたい。

ルリトラノオを小さくしたようなベロニカ・ブルーエイリアンと、キンシバイの仲間のヒペリカムの実をとり合わせて、少し素朴な籠花にしてみた。

通草（あけび）の蔓で編まれていて、お買い物籠にも花籠にも使っている。

横から見た奥行き

姫檜扇（姫檜扇水仙）の実

＜3頁の花＞　仙溪

花材　小鬼百合（百合科）
　　姫檜扇の実（菖蒲科）
　　スプレー菊（菊科）
　　吾亦紅（薔薇科）

花器　竹手付籠

いけばな花材は、古くから変わらずいけられてきたものもあるが、移りゆく時代と共に姿を消すものもある。しかしその一方で、新たに加わるものもあって、そうした新鮮な出逢いによって、いけばなの楽しみも深まってゆくのだと思う。

ヒメヒオウギは南アフリカ原産のヒオウギズイセンの園芸交配種で、園芸ではクロコスミアもしくはモントブレチアと呼ばれ、人気がある。その実が切り花で売られていた。人の臼歯みたいな形がユニークだ。細長い葉が涼しげについている。野の花をイメージして添える花を選び、籠にいけてみたが、風雅ないけばなになった。日本と南アフリカの自然の合作。

横から見た奥行き

オリーブの実

櫻子

花材　オリーブ（木犀科）
　　薔薇（薔薇科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　彩泥陶ビアジョッキ
　　（宮下善爾作）

オリーブの実が生った枝は、小さないけばなに向いている。いける機会が希な珍しい花材を主役としていける時は、とり合わせる相手の色やボリューム、器との相性に充分に気を配る。

艶やかな明るいグリーンの実と細長く固い濃緑色の葉。セピアがかったピンクのバラを添えると、西洋の香りがする。ダークブルーからモスグリーンへ、4段階の色土でデザインされたビアジョッキに挿すと、オリーブが心地よさそうにしてくれた。さらに軽やかな白のアンスリウムを足す。オリーブの故郷、地中海の光と風を感じる小品花。

横から見た奥行き

立華時勢粧を読む　㊲

立花秘傳抄　二

花之部（つづき）

紫楊花

祝言。中にばかり遣う。

異名、繡毬花、紫綉毬、紅綉毬。

夫木集

あちさいの下葉にすたくほたるをばよひらの数のそふかとぞ見る

あぢさい種々あり。順の和名集には草の部に入りたり。本草綱目には木の部に入りたり。然るに通用物と云う人あれども、詳らかならざる物か。後人尚これを勘えるべし。

あぢさい枝長きは水あげがたく、たむればしおれやすし。茎みぢかきは筒に入れて遣う。

あぢさい大輪なる物なれば、胴作り、前へはり出し、兼ねて座所をこしらえ、花ゆるやかにおしつからざるように指すべきなり。大輪なる花の類、いづれもこの意得あるべきことなり。

順の和名集＝源順が編纂した和名類聚抄のことか。和名類聚抄に、日本で最初の紫陽花の漢字表記がある。

中唐の詩人・白楽天に紫陽花と題する詩があるが、日本のアジサイとは別の花ではないかとされている。

立花時勢粧に紫陽花は1図のみ。すでに2度紹介したが再度掲載しておく。細く風雅な松の真と流枝。請には枇杷。黄色い百合と青紫色の紫陽花が、枝物と対等なバランスで配されている。要（要蘂）の赤い小葉があしらわれて全体が色鮮やかになっている。器の形も優しい。

第十七図（9頁）

立花　松除真

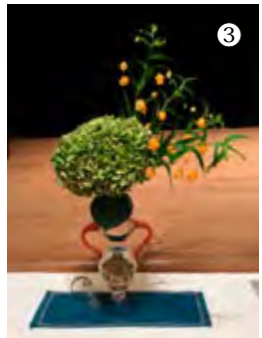
除心の内行の花形　中流枝立　寺田八郎兵衛

松　晒　百合　枇杷　柘植　紫陽花　要　小菊　檜扇

【　記録　】

岡山県本部夏季研修会

会期　7月30日(日)
会場　倉敷市民会館
講師　家元　副家元
・檜扇の生花
・季節の投入花
・師範の心得
「学び 磨いて 生かし 伝える」
・夏の花の楽しみ方
受講者　午前午後合計135人
(写真①②③④)



桑原専慶流のいけばな

桑原専慶流は、京都で江戸時代前期に生まれ、三百年以上続く華道の流派です。流祖の桑原冨春軒仙溪は、公家や武家、寺院の床飾りとして発展していた立花の名手でした。卓越した知識人で、当時の植物学にも造詣が深く、その学識を存分に駆使して一六八八年(元禄元年)に「立花時勢粧(りっかいまようすがた)」(全8巻)を出版しました。その中で述べられている花道論は、今日までいけばなに大きな影響を与え続けています。

流祖は自然を敬う心を何よりも大切に、自らの心眼で美の極みを探り、そこから感受したものを自由闊達に表現しました。秀麗で理知的な気風も特徴です。ただし、本質を見極めなければ、何ものにもとらわれない本当の自由は得られません。技を磨くだけでは駄目なのです。この道理をしっかりと踏まえて、一人ひとりが自らの奥深くに秘めている個性や創造性を鮮やかに開花させる。それが代々継承し、目指してきた桑原専慶流のいけばなです。

青柿とあかまんま

＜表紙の花＞　仙溪

花材　犬蓼（蓼科）
　　青柿（柿科）
花器　掛分陶花瓶（竹内眞三郎作）

まだ青い柿の枝が売られていたので、イヌタデをとり合わせて、人里の趣にいけてみた。カキの葉は分厚く重いため、早くにだらしなく下がってくるが、光沢のある葉は美しく、少しの間でも葉と共に楽しみたい。

カキの葉はビタミンCが豊富で、ポリフェノールの一種であるタンニンが多く含まれ、抗菌・抗酸化作用に優れている。すし飯をカキの葉で包んだ柿の葉寿司は、すし飯を乾燥から防ぐ以外に保存性を高める効果があると言われている。

イヌタデはアカマンマとも呼んで親しまれる。タデのように料理には使われないが、素朴な里の花として、身近に生けて風情を楽しみたい。

横から見た奥行き

Takaya Fujii

藤井隆也さんは京都芸大で日本画を学ばれ、ドイツ留学を契機にその伝統的な様式や素材にこだわらない、現代美術のフィールドに活動の領域をひろげてこられた。

桑原専慶流の師範でもあり、日本の「いけばな」への深い思いを持っておられる。日本、ドイツ、スコットランド、イギリスを行き来して制作と発表を続けておられるが、昨年と今年には、「いけばな」と深く関わりを持った芸術表現の試みをされた。

昨年デュッセルドルフでの2週間におよぶ展覧会では、262枚の楢（なら）の枯葉を拡大して描いたものが、部屋の壁を埋め尽くし、床に置かれた白い水盤には水が張られて樫（かし）（オーク）の枝が立つ。さらに樫の実、枯葉、青葉、それぞれを使った印象的な作品が置かれている。

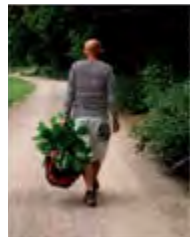
枯葉一枚一枚との対話が絵となり、葉や実の命の輝きに対する藤井さんの感動がオブジェから伝わってくる。そして毎日挿し変えられる生の枝によって、彼の自然との関わりを感じることが出来る。

藤井さんは京都の御室仁和寺の近くに住まいがあり、ここ20年間、日本にいる時はほぼ毎朝、仁和寺の裏山を散歩して、自然の移ろいに目を向けてこられた。

そんな中で、散り椿が人に踏まれる前に拾い集めて塩漬けにしたり、柿の紅葉の色彩を氷の塊にしまいこんだりして、朽ちゆく植物の命を作品にとどめてこられた。自然から受けた感動を純粋に自分を通して表現することにこだわっておられるように感じる。

262枚の葉は般若心経の文字数と同じで、藤井さんにとっての写経だそうだ。海外での修行の先にどんな芸術世界をこれから作られるのか、そして海外だけでなく日本でも、「いけばな」の心を表現する活動を展開していただきたい。

毎日ドイツの森を歩き、オークの枝を集め、ギャラリーに生ける。藤井さん独自の表現は、いけばなの深奥と繋がる。



出逢い花（30）

仙溪

唐胡麻（燈台草科）
女郎花（女郎花科）

花器　陶コンポート

紀元前四千年のエジプトの墓から、トウゴマの種子が見つかっているそうだ。オミナエシは秋の七草の一つ。東西文化の出逢い花というところか。

横から見た奥行き

レモンちゃん

暑い日は網代の上でゴロンと。

七竈の立花

仙溪

花型　立花　行の花形
花材　七竈の紅葉（薔薇科）
　　雪柳（薔薇科）
　　木苺（薔薇科）
　　竜胆二色（竜胆科）
　　スプレー菊（菊科）
　　三島紫胡（芹科）
　　アゲラタム（菊科）
花器　陶花瓶

山では夏に一部分紅葉した枝を見つけることがあるが、これは病葉と云って、病気や虫によって弱った葉が変色したもの。近年、初夏から初秋にかけて赤く色付いたナナカマドの枝が売られるようになったが、病葉の仕組みを利用して、枝を傷めてつくるそうだ。秋の紅葉は葉が枯れやすいが、こちらは長く保つ。

作例では垂れ下がる副のナナカマドと、立ち上る請のリンドウの対比を大切にして立てた。

横から見た奥行き

野茨と鶏頭

仙溪

花型　生花　株分け
花材　野茨（薔薇科）
　　鶏頭（莧科）
花器　陶水盤

ノイバラ3本とケイトウ3本で、生花の稽古をした時の見本にいけた花。自分で花屋で枝を選ぶと、いけやすい枝を選んでしまうが、稽古の花は花屋が仕入れた中から人数分に分けられたものなので、中にはいけ難い枝も混じる。それをなんとかするのもまた楽しい。

野性味のある赤い実に、ケイトウの花色が鮮やかに寄り添い、その瑞々しい葉もなくてはならない存在を感じさせてくれる。

ノイバラは役枝の選択が重要となる。自然の躍動感を大切にして、花型に生かすこと。小枝の整理をどうするか。できるだけ残しつつ、最後に切るべき枝を切る判断も大切だ。手にした枝でベストを目指す。花型は全体のバランスに注意する。水際が美しく、生命感にあふれていること。このことは、どんな生花の場合も大事にしたい。

生花の基本が身についたら、是非とも楽しんでいけてほしい組みあわせである。

桑原専慶流いけばなテキスト651号　2017年9月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

赤い葡萄

櫻子

花材　アマランサス（莧科）
　　スモークグラス（稲科）
　　葡萄（ぶどう）3種（葡萄科）
　　緑　シャインマスカット
　　赤　クイーンニーナ
　　黒　ピオーネ
花器　白ガラス花瓶
　　高足ガラス皿

今年も待ち遠しい秋が少しずつ近くなってきたようだ。

秋は果物の季節。岡山から頂戴した固くて大きな葡萄は一粒一粒が艶やかで工芸品のようだ。

新しい品種も実りを迎えた。「クイーンニーナ」という赤い葡萄は、至れり尽くせりで育てられたお姫様のよう。もったいなくてすぐには食べられない。いつもの事だが、テキストの写真に納めてからゆっくり楽しみたい。

同系色のアマランサスも岡山育ち。

いつも岡山の恵みをいただき感謝の気持ちを込めていけた花。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
10月号
No.652

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

パンパスグラス

＜表紙の花＞　櫻子

花材　パンパスグラス（稲科）
　　鶏頭2種（苋科）
　　ビバーナムの実（忍冬科）
花器　菱形紋陶花器

大きな庭でないと栽培が困難なパンパスグラス。雄大な自然の中で伸び伸びと育つイネ科の多年草。8月のお盆の頃出回る若い花穂は剥いても細くて柔らかくボリュームの無いまま萎んでしまう。

9月半ばまで待つと、やっと大きな花穂のパンパスグラスが出てくる。ふさふさした銀白色で絹糸のように光沢がある。私は先端を切り落として、風に揺れるような姿にいけるのが好きだ。

今回は花冠が扇型のボンベイ鶏頭と合わせた。インドの種から育ったボンベイ鶏頭。これも輝くような花が特徴だ。色づき始めたビバーナムの実を足元に添えた中秋のいけばな。

横から見た奥行き

アナベル

＜2頁の花＞　櫻子

花材　鈴薔薇（薔薇科）
　　アナベル（紫陽花科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶花瓶（伊藤典哲作）

アナベル…ヨーロッパの美しい女性を思わせるような名前。北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸品種で、真っ白で大きな花房になる。

日本のアジサイと同じく栽培が容易で、毎年良く開花するらしい。京都の御池通り沿いにも沢山植えられていて、咲き始めのグリーンから白、又グリーンへと色が変化していくのを見るのが楽しい。切り花でも夏から秋の頃まで出回るので、稽古花としても使うようになった。

秋の半ば頃、花房が大きくなり半分ドライフラワーのような感触になった頃が一番使いやすい。萎れる心配がないので大きく伸びやかにいける事ができる。長くて重いスズバラとバラをバランス良く繋げてくれる。

横から見た奥行き

菊の季節

＜3頁の花＞　仙溪

花材　雪柳（薔薇科）
　　菊2種（菊科）
　　南瓜（かぼちゃ）（瓜科）
花器　飴色釉陶花瓶

今年も菊の季節がやってきた。朝夕が涼しく感じられた9月でも、飛騨マムなど、限られた菊しか手に入らなかったが、10月には糸菊をはじめ、嵯峨菊、肥後菊など、菊の季節ならではの品種が出そろう。秋の紅葉ものや実ものなどとのとり合わせに、色、形、大きさ、咲き方の様々な種類の中から合わせる菊を選ぶのも楽しみである。

作例は昨年の11月はじめに撮影したもので、いけて数日経ち、菊が見事に大きくなったところ。糸菊などをいける場合は、どのくらいの大きさに咲くのか想像していけたい。

丁度いただいた南瓜（かぼちゃ）を一緒に飾っていたので、撮影にも同じように置いて撮ったが、優しい色合いがよく似合っている。

飛騨（ひだ）マム

飛騨マムは飛騨高山で生産されている色鮮やかな菊のブランド名。高冷地での栽培が花弁の発色に良いようだ。今年はスプレータイプの飛騨マムを9月にいけることができた。左の写真がそれで、いけて2週間経っているのにいつまでも力強い。

レモンちゃんも一緒に稽古したいのかな。

自然の色を大切にする

櫻子

花材　丸葉の木（満作科）
　　鶏頭（苋科）
　　秋海棠（秋海棠科）

花器　陶花瓶

赤や橙や黄色に色付く葉をいけるのも、秋の楽しみの一つだ。なかでもマルバノキの色付きは特に好き。一本の枝にもグラデーションがあり、さらに一枚の葉の中にも色の変化がある。今年はどんな花と合わせてみようかと、毎年楽しみにしている。

はじめてシュウカイドウを合わせてみた。瑞々しい緑の葉が加わることでマルバノキの葉色がより鮮やかに見える。さらにピンクの花と赤い丸葉が優しく呼応してくれた。ケイトウの黄色と花瓶の紺色が、全体の色彩に厚みを与えてくれた。

こんな風に自然の色を自分なりに生かすことができた時、心から嬉しく思う。

横から見た奥行き

中比＝なかごろ。そう遠くない昔。　ざるべけんや＝しないでいられようか。

立華時勢粧を読む　㊳

立花秘傳抄　二

花之部（つづき）

くちなし

非祝言。水ぎわ。

梔子。一名、越桃。禅友。

桐の花

祝言。心、請、副。

一名、泡桐。栄桐。ひとは草（蔵玉集）。

桐の花、心に立てて面白き物なり。中比の人、立てることを知らざるゆえ、これを用いず。古人の花形略あり。今様これに随いて用いる。惣じて立花に嫌うべき物は、雑木、雑草、香のあしきもの、針のあるもの、食物の類、これを嫌う。然るに近代は朝鮮国その外遠境より、珍しき草木多く出せり。花伝書に載らざる花なりとて、指さざるべけんや。

第三十四図
立花　梅擬除真
冨春軒
梅擬　晒木　菊　松　椿　柘植　熊笹　小菊　柏

菊薫る秋の立花。「立花時勢粧・中」の最初の図。冨春軒作で堂々としている。枝垂れた梅擬によって球体を感じる。左下水際から出た枯れ枝が、控枝の松と前後で重なり輪のように見えている。この枯れ枝が、花形の丸みを完成させているようにも見える。冨春軒の創意を感じる立花である。

実之部

沢水木

祝言上中より遣い、下る時は下にも遣うべし。

晒木、苔木を付けず。立て様梅花に同じ。

水木

祝言。右に同じ。立花大全に晒木付くと有るは非なり。立てよう梅に同じ。

梅もどき

祝言。晒木用いる。苔木用いず。立て様梅に同じ。

右三木は葉有るといえども、葉をもぎて用うべき。葉もがざれば早く実しおれるなり。又見事ならず。

七かまど

祝言。上中段。

苔木、晒木を用いず。大木有るといえども、木まれなるゆえ、大形は請、添、胴、控枝ま

第六十四図
立花　梅擬除真
筑摩九朗右衛門
梅擬　薄　松　松笠　菊　椿　柏　水仙　嫩

菊から水仙へと移る晩秋の立花。薄の葉が大きく弧を描いて下がり、天を突く真の梅擬との対比が見事。大きな松笠のようなものが使われているのも特徴的である。

でに用い来たれり。大枝あらば心に用うべし。

今号で「花の部」から「実の部」に変わる。ウメモドキのような赤い実の枝は21の図に見られ、内5作で真に使われている。また15の図で菊が合わせてある。梅擬と菊は確かによく似合う。

解説の沢水木が現在の何にあたるか調べたが分からない。「水木」にしても、ミズキの実は黒いので別の木を指すのかも。赤い実が集まって描かれているのはウメモドキと同じモチノキ科のアオハダの実か。もしくは濃赤色のタマミズキのようにも見える。これが沢水木のことだろうか。今後も調べてみたいと思う。

※参考文献

『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第六十九図

立花　沢水木（？）除真

冨田屋甚左衛門

沢水木（？）松　柳　椿　伊吹　小羊歯　石蕗　水仙

著我　躑躅の紅葉（？）

初冬の立花。赤い実が小枝に集まっているのは梅擬ではなく、青膚、もしくは玉水木ではないかと思われる。右下の菊に見える花は石蕗（つわぶき）か。その上にのぞく紅葉した輪生葉がよく効いている。左後ろに垂れる柳と、右後ろから前へと出た松の対比が特徴的。

菊の生花

仙溪

花型　生花　真型
花材　菊（菊科）
花器　天女模様銅花瓶

「聖人君子」とか「君子危うきに近寄らず」の君子は、中国での理想的人格の象徴の名だ。清らかで高潔。学識と人格に優れた人。高い徳があり人々の模範となる人のことだ。

その君子のつく言葉に「四君子」がある。君子に匹敵（ひってき）する植物を春夏秋冬から一つずつ選んだもので、蘭、竹、菊、梅の四つを四君子と呼ぶ。

この内の竹と梅と蘭（野生種）が簡単にいけることができないのに対して、菊はとても身近な花材だ。秋には様々な園芸種の菊をいけることができるが、育てる人がいて、活けて楽しむ人がいる、大変豊かな文化だなとしみじみ感じている。

さて、菊の古典花となると、どんな菊でもいい訳ではない。生花には撓めに耐えられる粘り強さと葉の良い品種。立花には倒して育てたものが必要だ。

そして古典であれ現代であれ、菊を自然調に活ける時には、君子の品格が感じられるように心がけたい。

洋花の生花

仙溪

花型　生花　株分け
花材　ピンクッション
（ヤマモガシ科）
クルクマ（生姜科）
花器　練込陶水盤

夏から初秋の、花が保たない時季にも、いけて長く楽しめる生花の作例。

ピンクッションもクルクマも、一種だけではなにか物足りないが、このように水盤に株分けで活けると、動きや潤い、色彩を互いに補い合ってくれる。

クルクマは10月頃まで切り花が売られているし、ピンクッションも手に入りやすい。一度活けてみて、その面白さを実感し、来年以降の夏の作例として覚えておこう。

羽ばたく

仙溪

花材　アレカ椰子（椰子科）
　　グラジオラス（菖蒲科）
　　モカラ（蘭科）
花器　鱗紋陶コンポート

9月はじめに稽古でいけた花。アレカヤシは夏の花材というイメージがあるが、作例のようにとり合わせる花色によって、秋のいけばなにもなる。

作例ではアレカヤシを背中合わせに立ててみたが、あたかも鳳凰が羽ばたくような造形美が生まれた。そこに赤いグラジオラスを中央に、オレンジ色のモカラを低く集め、アレカヤシと調和するようにいけている。

アレカヤシには大小があるので、このような姿にいけたい時は、大きめで、軸の丈夫なものを求めたい。

横から見た奥行き

桑原専慶流いけばなテキスト652号　2017年10月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

オモチャメロン
ククミス

仙溪

花材　オンシジウム（蘭科）
　　木苺（薔薇科）
　　オモチャメロン（瓜科）
花器　陶花器（竹内眞三郎作）

このイガイガの実はアフリカ原産で瓜科・胡瓜属の蔓性植物、ククミスの一品種である。花屋には縞模様のあるものなど、数種類のククミスが、オモチャメロンの名前で売られていた。

一つの種類を2個買い求め、実の軸に針金をつけてキイチゴの茎にぶら下げると、自然な感じでいけばなに取り込める。

ククミスが目立つように、シンプルにオンシジウムだけを加えた。キイチゴが紅葉していれば秋らしいいけばなになるなと想像しながら、敷物で季節感を補った。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
11月号
No.653

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

枝垂れを楽しむ

＜2頁の花＞　櫻子

花材　更科升麻・晒菜升麻（金鳳花科）
山鳥兜（金鳳花科）
木苺（薔薇科）

花器　陶花瓶（林平八郎作）

サラシナショウマの伸びやかな白い花穂は、一本一本かたちが違って自然味がある。とり合わせにも、自然の風合いが感じられる相手を選びたい。長く枝垂れたヤマトリカブトと共に長く前へ出し、足元に色付いた木苺を加えて両者をつないだ。

横から見た奥行き

ダンシング・レディース・ジンジャー

<3頁の花>　櫻子

花材　グロッバウィニティ（生姜科）
アンスリウム（里芋科）
夏櫨の実（蹴躓科）

花器　白磁花瓶

ピンク色のやじろべえが幾つも繋がっているみたい。その手の先に黄色い花が顔を出している。非常に個性的な花だ。グロッバ・ウィニティはジンジャーの仲間で、ダンシング・レディース・ジンジャーとも呼ばれる。たしかに女の子達が両手を広げて躍っているような花だ。

淡い花色なので、深紅のアンスリウムを合わせると華やかになる。季節感を加えたくて、夏櫨の実だけになった枝を覗かせてみた。グロッバと一緒にステップを踏んでくれているみたいだ。

横から見た奥行き

水仙一色立花

＜4頁の花＞　仙溪

花型　立花　行の行形
花材　水仙（彼岸花科）
花器　陶花瓶

昨年は二条城の二の丸御殿で水仙の立花を撮影する機会を得た。歴史を感じる場所にあわせて、立花時勢粧の絵図にある水仙一色立花を再現してみたが、葉が自由奔放に伸びていて、しかも絶妙なバランスを保っているのに驚かされた。

今年の１月末、淡路島の灘黒岩水仙郷へ自生の水仙を見に行った。１８０年前に海岸に漂着した球根を漁師が山に植えたのがはじまりで、今では５００万本の野生の水仙が斜面に咲き乱れる。

大雪のあとで倒れているものもあったが、再び立ち上がろうとする姿は立花図の水仙そのものであった。波打つように伸びるものや、１８０度方向を変えるもの。自然がつくる造形は予想を遥かに越える。

淡路島の灘黒岩水仙郷にて

立花秘傳抄　二

実之部（つづき）

たらよう

非祝言。上中。

苔、晒木を用いず。

仙蓼

祝言

古代は中までに用いる。今は水際に遣う。

みむらさき

非祝言。通用なり。上中。

一名、紫荊珠、紫荊花。江戸にては紫式部といえり。

つる水木

祝言。通用。上中。

近代、遣い始めたる物なり。本名慥かならず。指し様、藤と同前なり。

第七十三図
立花　松除真
丸屋勘助
松　梅擬　鶏頭　杜若　雪柳（？）椿　伊吹
苔　小菊　著莪

下段から立ち上る真の松に、赤い実が景色をつくっている。内側と外側に寄り添いながら、弧を描いて伸びる枝には躍動感がある。花は鶏頭、秋の杜若、椿、小菊。色鮮やかな立花だ。大きく左に除いた真の松が、正真の空間をゆったりと作っている。

深山樒（みやましきみ）

非祝言。非通用。水際に用いる。

深山は名を指すとて、水際の奥深く、又は前にても木かげに立つべきなり。草留の方に指さず。草は野なり。みやまにあらず。又景気もうつらぬものなり。

たちばな

祝言。非通用。水際。

燈籠草（おうづき）

祝言。水際。

異名、洛神珠（らくしんしゅ）、紅姑娘（こうころう）。

和名、ぬかづき、少人女中の客に必ず用いる。

えびついばら

非祝言。水際は控に宜（よろ）しい。

南天

通用の部に詳らかなり。

※立花図転載

『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第七十八図

立花　松除真

冨春軒

松　柳　梅　水仙　柘植　椿　多羅葉（たらよう）　伊吹　著我

「立花時勢粧・中」の最後を飾る冨春軒の立花。立ち上る松の真は七十三図に似るが、こちらは真の出口が高く除きも浅い。左右の枝垂柳と松の形の対称が見事だ。その間の赤い実は「たらよう」だと思いたい。タラヨウはモチノキ科の常緑樹。別名ハガキノキで葉裏に文字が書ける。立花の魅力を伝え続けてほしい、との思いが込められているのでは。

高松・栗林公園

香川県は古くから讃岐国と呼ばれる。これは、国の形を見た時に、四国の他の国に比べて横幅が狭いことから「狭緯」（緯＝東西の距離）と呼ばれていたのが、「讃岐」に変わっていったそうだ。

讃岐といえば、「讃岐三白」とよく云われるけれど、三つの白いものが何かと聞かれて正確に答えられるだろうか。正解は綿、砂糖、塩である。

讃岐は晴れの日が多くて雨が少ないため、常に水不足と闘ってきた。米作りのために作られた溜め池は一万四千余り。そのようにして苦労して米をつくる一方で、自然条件を生かした特産物として生まれたのが綿と砂糖と塩であった。

綿花や砂糖黍は、温暖で雨の少ない気候に適した作物。そして塩づくりには広い遠浅の海岸と晴天の日が多いところがむいている。

近年「うどん県」と呼ばれるほどのブームとなっている「うどん」。こちらも日照時間が長いため、古くから二毛作によって小麦の生産が盛んで、うどんに慣れ親しんでいたことも背景になっているようだ。

さて、10月はじめに高松を訪れたのは、日本いけばな芸術四国展のためであったが、朝の手直しのあとは高松周辺を散策することができた。イサムノグチ庭園美術館、屋島寺、港の倉庫跡を利用したアートスポット、とても長いアーケード商店街、うどん屋、骨付き鶏なども堪能した。

どれも印象に残るものだったが、とりわけ感銘を受けたのが「栗林公園」である。

高松港から南へ約3キロ。紫雲山の東麓に位置し、面積75ヘクタールは文化財庭園としては国内最大の広さだそうだ。四百年近い歴史をもつ大名庭園である。

なんといっても低く拵えられた松の見事なこと。香川といえば鬼無や国分寺という松の産地が有名だが、松の生育に適した土壌と、松の手入れ技術が優れているのだろう。

栗林公園では丁度松の選定作業をされていたが、一千本の松の手入れはさぞ大変なことだろう。庭園内の小川では、丸石についた藻を5人の男性が箆で一つ一つ丁寧にこそぎとっておられた。気の遠くなる作業である。

昔、飢饉のとき、高松藩2代藩主の松平頼常は、被害に遭った人々を雇って庭園拡張をおこなった。雇用を生んで民を救ったわけだ。そんな藩主が愛した庭園ゆえに、高松の人々も愛着と誇りを持っているのだろう。貴いことだ。

その土地に根ざした文化の底力を感じた。いつか是非とも鬼無の松栽培も見てみたい。

栗林公園にて。①南庭全景。②松と。③薩摩藩寄贈の蘇鉄。

丁字草　山鳥兜

＜9頁の花＞　仙溪

花型　生花　株分け
花材　丁字草（夾竹桃科）
　　山鳥兜（金鳳花科）
花器　陶水盤

楓の紅葉、銀杏の黄葉、ほかにも様々な植物の葉が秋色に変わる。きっと皆さんにも、この季節になると心待ちにする色があるのではないだろうか。

四国の花展でいけたオカトラノオの紅葉も心に残る色彩だった。

作例の丁字草も、その繊細な美しさは他の枝には無いものがある。黄色、オレンジ色、赤色、いろんな色の葉が混ざっている。ヤマトリカブトの紫色とは相性がいい。水盤で株分けにして、秋の輝きを楽しんだ。

カラスウリありがとう

＜表紙の花＞　仙溪

花材　烏瓜（瓜科）
　　杜鵑草（百合科）
　　薄の穂（稲科）
花器　陶手付花器

カラスウリを葉がついたまま活けたのは初めてだ。これは丁度テキスト撮影に合わせてお弟子さんが届けてくれたもの。長い蔓の切り口に水をあて、一本ずつビニールに入れて大切に持って来て下さった。さぞ蔓を外すのに苦労されたと思う。葉はすぐに萎れてしまったけれど、こうして写真に納めることができた。なんと贅沢なことだろう。いけばな冥利に尽きる思いだ。

その後、枯れた葉を取り去って、相手を変えながら、すでに一ヶ月以上いけて楽しんでいる。写真では緑色だった実も真っ赤になってきた。カラスウリの種は大黒様の形なのだが、そろそろ取り出してみようかな。

横から見た奥行き

秋色を楽しむレモンちゃん。花は烏瓜、鉄砲百合、木苺。

創立50周年記念
日本いけばな芸術四国展

テーマ「半世紀の夢を咲かせて」

会期　10月5日(木)～10日(火)

会場　サンポート高松　玉藻公園・披雲閣　栗林公園

④

③

⑥

⑤

⑧

⑦

桑原専慶流いけばなテキスト653号
2017年11月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）
http://www.kuwaharasenkei.com

シーグレープ

櫻子

花材　シーグレープ（蓼科）
　　アメリネス（彼岸花科）
花器　ガラス花器

シーグレープは浜辺葡萄とか心葉とも呼ばれる。丸い団扇のような葉が面白い。赤と黒のどっしりしたガラス花器にいけると、葉の葉脈の赤色が際立つ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
12月号
No.654

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

カンガルーポー

＜2頁の花＞　櫻子

花材　カンガルーポー2種
（ハエモドルム科）
薔薇（薔薇科）
花器　陶製鍋（林 聡江作）

見れば見るほど不思議な花。先が6つに裂けていて、細い毛に覆われた筒状の花を咲かせるが、カンガルーの前足（ポー）に確かに似ているような気がする。カンガルーを近くで見た事がないので、なんともいえないが。

オーストラリア原産のハエモドルム科だが、ハエモドルムとは「血の贈り物」という意味。昔からオーストラリアの人達が、赤い地下茎を食用にしていたからという。花色は黄色だけではなく、赤、黒、オレンジ、紫と多彩だ。今回はピンクシルバーも混ぜてみた。土鍋にいけて暖かな雰囲気に。

横から見た奥行き

汽車ポッポ

＜3頁の花＞　櫻子

花材　ヒペリカム（弟切草科）
　　アルストロメリア
　　（アルストロメリア科）
　　ダリア（菊科）
花器　陶製機関車

「長らく流誌に続けてきた『ホッホチャンとケンチャン』は、素子と孫の健一郎の会話から生まれた、いわば『花遊び』のスケッチである。そして、その『花遊び』を通じて、いけばなに深い関心を持ってもらいたかったのである。」と父が本の序文に書いている。健ちゃんも21才になった。お友達を相手に先日はじめての稽古をしていたが、いけばなへの興味が深まってきたようだ。

子供のためにいける花。そんな気持をこめて焼き物の機関車に花をいけた。シュッポシュッポと、童心に帰って、心は野山を駆け巡る。

横から見た奥行き

ロイヤルマッカム

＜表紙の花＞　仙溪

花材　躑躅（躑躅科）
　　水仙（彼岸花科）
　　小菊（菊科）
花器　陶花器
　　（ロイヤルマッカム窯）

仙齋＆素子の「花ふたり旅」オランダ編で、「野道のお地蔵さんに供えた花のよう」と父が書いているが、牧場の柵に縄で括りつけていたのはこの花器である。デルフト陶器の工房の一つ、マッカム窯で作られたものは、現在ロイヤルマッカムと呼ばれている。

時々、稽古場の棚に飾っているが、和室の雰囲気にも程良く調和してくれる。日本の伊万里を真似て絵付けがなされた歴史を持つからかもしれない。マッカム窯の歴史は古く、1572年創業だそうだ。

はじめて和花をいけてみたが、優しく受け止めてくれた。初冬の仄かな緊張感が心地よい。

横から見た奥行き

シンフォリカルポス

櫻子

花材　シンフォリカルポス（忍冬科）
　　ユーカリの蕾（フトモモ科）
　　デンファレ（蘭科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　鹿耳ワインクーラー

ムラサキシキブの実かな？と思うほど似ているが、実が密集してブドウのように固まって付いている。これは北アメリカ原産スイカズラ科のシンフォリカルポスという名前の木だ。寒冷地でも暖地でも良く育つので最近よく見るようになってきた。白い実の改良種もあるが、ワインレッド色は原種に近いらしい。葉が付いていても取り去っていけた方がいい。ミリオクラダスのようなたっぷりの緑を添える事で艶やかな姿になる。

グレーの実に似ているのはユーカリ・グロボラスベリーの花の蕾。どちらも弧を描く姿が綺麗で取り混ぜていけてみた。白いデンファレを足元に挿して、これもクリスマスに飾ろうかな。

横から見た奥行き

カラフルないけばな展

櫻子

小学校の音楽教師をされている鈴木慶由さんが、京都市の子供教室案内を利用して、月一回のこどもいけばな教室（毎月申込制）を始めて9年目になる。その初めての発表会に全面的に協力させていただいた。小さくてもカラフルでセンスの良い花会になった。きっといつまでも皆の記憶に残ることと思う。

①

レモン師匠

床の間を拝見するレモン師匠。
稽古中に集まってお軸の絵の説明をしていたら、いつの間にか特等席に座って、一緒に話を聞いていました。いつになく姿勢もいいような。

京都新聞10月21日㈯朝刊・京の彩時記「道を究める」に櫻子副家元のことが紹介されました。（車の広告企画連載として）

第3種郵便物認可　　対流　　創造　　楽所　　発明　　2017年(平成29年)10月21日　土曜日　　全面広告 10

■京の彩時記
道を究める ①

企画・制作＝京都新聞COM

千年の歴史と伝統が残る古都・京都に連綿と受け継がれる文化と芸術。先人たちの教えと伝統を守り、未来へつなぐ思いと精神が京都をより豊かな文化都市へと育む。今回、華道桑原専慶流副家元の桑原櫻子さんにいけばなについて伺った。

桑原櫻子　桑原専慶流副家元

いけばなの魅力は花を通して四季を感じ花との対話を楽しむ心の豊かさ。

桑原専慶流は、17世紀後半の江戸時代前期、立花の名手とうたわれた桑原専好軒仙渓を流祖として300年以上の歴史を誇る華道の家元。六角通に面した邸宅は、半間ほどの格子戸を抜けると、水打ちされた潜く長い石畳の露地が続く。水盤には季節の花が浮かび、玄関の土間の掛け花が訪れる人を温かく迎える。一歩足を踏み入れれば、大型ビルが立ち並ぶオフィス街の一角とは思えないほどの静謐が辺りを包む。坪庭のある築100年近い京町家は、「戦後、櫻子さんの祖父が手に入れた。6歳から祖父の13世家元、桑原専渓にいけばなを学び、13歳で両親と離れ祖父のもとで修行が始まった。父母と暮らすようになり両親と離れ、祖父母と暮らすことが、伝統を守ることにつながるのではないでしょうか。いけばなの本質は、きれいに花を飾る技術より、花を通して四季を感じ、花との対話を楽しむ心の豊かさです」

暮らしの中に花を取り入れることが、いけばなへの関心をもたらし、京都の伝統文化を深く根付かせる。

「中学1年の時から両親と離れ、祖父母と暮らすようになりました。毎日厳しい稽古が続く。水盤には季節の花が浮かび、玄関の掛け花が訪れる人を温かく迎える。一歩足を踏み入れれば、大型ビルが立ち並ぶオフィス街の一角とは思えないほどの静謐が辺りを包む。坪庭のある築100年近い京町家は、「戦後、櫻子さんの祖父が手に入れた。6歳から祖父の13世家元、桑原専渓にいけばなを学び、13歳で両親と離れ祖父のもとで修行が始まった。父母と暮らすようになり両親と離れ、祖父母と暮らすことが、伝統を守ることにつながるのではないでしょうか。いけばなの本質は、きれいに花を飾る技術より、花を通して四季を感じ、花との対話を楽しむ心の豊かさです」

暮らしの中に花を取り入れることが、いけばなへの関心をもたらし、京都の伝統文化を深く根付かせる。

◎桑原櫻子（くわはらさくらこ）
1969年京都市生まれ。6歳から祖父である桑原専渓13世家元の桑原専渓にいけばなを習う。81年同流師家免状獲得。他都市重視し、たゆまずないけばなを修業をする。いけばなの原型といわれるなれ、古来いけばなの生花、現代いけばなの盛花、投入中に伝える。

立華時勢粧を読む ㊵

立花秘傳抄 二

実之部（つづき）

藜蘆

祝言。葱茐、葱炎、老母草（藻塩に有り）。

老母草は前置ばかりに用いて、外に遣うことなし。花道第一の秘伝の物なり。

おもとに指し合わせぬ物。草木の実のたぐい。同広葉のたぐい。著莪、水仙、くまざさ。

葉数七枚九枚、もしくは十一枚、半に遣う。常のことなり。又六枚八枚十枚、調に遣うても苦しからず。口伝。

おもとの実一つを一株立てという。二つを二株と云う。葉つかいその外、秘伝あり。師範なくては立つべからず。凡そその姿ばかりを云う時は、葉組しまりたるは幽玄ならず。ゆるやかなる時は、くだけて勢いなし。緩からず急ならず。そのさかいに至りては、輪扁か輪たるべし。たとえまた伝受したりとも、執行未熟の人ならば、出生玄妙の所、瓶上にいかでかうつさんや。

半＝奇数。調＝偶数。執行＝修行。いかでかうつさんや＝どのようにしてうつせるだろう（いや、うつせるはずがない）。

※前号の訂正＝（7頁）燈籠草

第八十七図
立花 柳除真 おもと前置
冨春軒
柳 梅 柘植 苔 嫩 檜 万年青

ある師の云う。古代はおもとの前置、懇望度々におよびて立てるといえど、座席をえらび、床にあらざれば指さず。立てる所へ人の来る事をゆるさず。花立てしまい水打ちて、あるいは客、亭主より外、見することなし。その後前置をあげて花台の上におき、花形ばかりを残して、扨あまねく見する、これ古法なり。誠に花道を重んじ、そのつたえの大切なることこの如し。近代は茶会の花ともいわず、相伝なき人も妄りにこれをさす。道おろそかにするのいたり、なげかしき事なり。

通用物之部　附目録

竹　笹　牡丹
藤　小しだ　萩　白丁花　薔薇　磐檜葉
酴・　庭桜　粉団花　ひとつ葉　茘枝
小てまり　米柳　小米花
黄梅　連翹　種紫
つる水木　えびついばら　仙蓼
きじの尾　下野　荵
矢筈　磐梨　がんそく

通用物とは出生木にあらず、草にあらざる物なり。竹まず通用の第一なり。藤これに次ぐ。（本草につるの部に入り、歌事に草の部に入る）。つる水木、連翹のたぐいも又同じ。その茎、木にして木にあらざるは南天、牡丹のたぐいなり。茎、草のごとくして冬枯れせざるは山吹、庭桜の類なり。常に山木に生え混じりて、野に生えざるは小羊歯、一つ葉のたぐいなり。たとい末代に珍しき草木出たりとも、右の理をもって立花に用いるものなり。

立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め、木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れざるを第一とす。十三ケ条法度に云う。草にて木を包み、木にて草をつつむと。然るに通用の徳たること、木と木との間に立てる時は木となり、草と草との中に立てれば草となる。これ重宝の物なり。

「実の部」の最後は花道第一の秘伝のもの、万年青について書かれている。万年青のある立花図は3つあり、そのうち2つは桜一色の前置になっている。もう1つは「立花時勢粧・下・秘曲の図」の中の「おもと前置」と名がついた第八十七図である。

万年青には実の類、広葉の類を一緒に使わないこと。著莪、水仙、熊笹もだめと書かれているが、これらは万年青に対する敬意の表れである。桜一色のところにも同じようなことが書かれていて、桜や万年青を扱う時の心構えとして知っておきたい。

第八十七図では枝垂柳、紅白の梅、柘植で主な役枝をつくり、正真とあしらいに紅い若葉と檜葉が見える。落ちついた風格の中にも命の鼓動を感じる。その命の大本のように万年青が水際に座っている。そんな印象の立花である。

ここでは藜蘆の字が使われているが、中国名の万年青が使われるのはもう少し後になる。老母草もなるほどと思う名前だ。

さて花材解説は次に「通用物の部」に入る。

「立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め」

「木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れざるを第一とす」とあるように、木と草によって山と野の景色をつくるようにするのだが、山の景色にも、野の景色にも使うことができる花材が「通用物」であり、ある時は木になり、ある時は草となって、どちらにも使える重宝なものとしている。

ヒムロスギ

仙溪

花材　姫榧杉（檜科）
　　ガーベラ（菊科）
　　ストック（油菜科）
花器　陶花器（前田安徳作）

クリスマスシーズンに出回るヒムロスギ。花屋ではサツマスギの名前がついているが正しい名前で覚えておきたい。スギと名がつくがサワラの園芸品種で自然分布はない。漢字では姫榧杉あるいは檜榧杉。

灰色がかった葉のふわふわした優しい手触りが気に入っている。相手はアマリリスやガーベラなどのはっきりとした色と形の花がいい。そして赤い敷物。見つけた時に是非とも手に入れておきたい。

心温まるクリスマスを!。

横から見た奥行き

赤い実と紅葉の立花

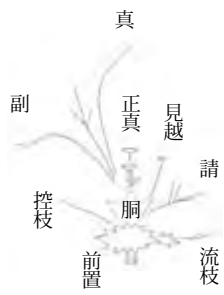
仙溪

花型　立花
花材　雪柳（薔薇科）
　　梅擬（黐の木科）
　　伊吹（檜科）
　　木苺（薔薇科）
　　糸菊2種（菊科）
　　二輪菊2種（菊科）
花器　陶花器

園芸種の梅擬は枝が短くて実が大きい。伸びやかさに欠けるので、紅葉した雪柳で自然味を補った。

立てて一週間たったところで撮影したが、菊が大きく開いて華やかな秋色の立花になった。

横から見た奥行き



水仙と小菊の株分け

仙溪

花型　生花（せいか）　株分け
花材　水仙（ひがんばな）（彼岸花科）
　　小菊（菊科）
花器　三島陶鉢

絵の画題で「歳寒三友（さいかんさんゆう）」とは、松・竹・梅、もしくは梅・水仙・竹である。どれも冬の寒さに耐える植物で、節操を曲げない士人（しじん）の精神を象徴する意味がこめられている。士人とは高い教養と徳を備えた人のこと。

水仙は凛とした姿にいけたい。5本のうち花は真・胴・留に低く入れている。

横から見た奥行き

桑原専慶流いけばなテキスト654号　2017年12月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

ロウヤガキ

仙溪

花材　老爺柿（柿の木科）
　　菊「色自慢」（菊科）
　　スプレー菊（菊科）
花器　陶花瓶

ロウヤガキの立派な枝が売られていたので、菊と投入にしてみた。これでも小振りな枝を選んだのだが、花器がひっくりかえりそうなくらい重みがある。長く垂れる枝を上の方から出すために仕掛けを工夫している。

艶やかな花器の質感にロウヤガキの照りがよく似合う。橙色のスプレーギクが実の色に明るさを添え、赤紫色の新種の菊が全体の色彩に鮮やかさを加えてくれた。

ロウヤガキは中国原産で老鴉柿とも書く。別名を衝羽根柿。このロウヤガキには鋭い棘があったが、いける際には注意したい。

横から見た奥行き